

住宅クロスレビュー | 17 都市住宅を住み継ぐ

築50年を超えて高まる評価 引き継いだ次世代が見据えるのはその先

取材・文 | 松浦隆幸
写真 | 川辺明伸

2人の建築家が、共通するテーマで語り合う「住宅クロスレビュー」。
今回は「都市住宅を住み継ぐ」をテーマに、築50年を過ぎた都市住宅の代表作2例を取り上げる。
1件は、東孝光氏の設計で1966（昭和41）年に完成した自邸「塔の家」。
もう1件は、六角鬼丈氏の設計で1967（昭和42）年完成の自邸「クレバス」。
どちらも、すでに設計者本人は鬼籍に入り、それぞれの家で育った子女の建築家に引き継がれている。
塔の家を継いだ東利恵氏と、クレバスを守る六角美瑠氏が、それぞれの住宅がたどってきた歴史と、
後世に残していくための思いを語り合う。

設計 | 六角鬼丈
「クレバス」
1967年
六角美瑠



ろっかく・みる 1977年東京都生まれ。2001年筑波大学芸術専門学群建築デザイン領域卒業。2003年東京藝術大学大学院建築科修了。2005年六角工房分室ミルアトリエ開設。2010年東京大学工学系研究科博士課程修了。現在、神奈川大学教授。

ろっかく・きじょう 建築家（1941–2019）／東京藝術大学美術学部建築科卒業後、磯崎新アトリエ入社。1969年に六角鬼丈計画工房開設。東京藝術大学名誉教授。



塔の家にて。東利恵氏（右）と六角美瑠氏

設計 | 東孝光
「塔の家」
1966年
東利恵



あずま・りえ 1959年大阪府生まれ。1982年日本女子大学住居学科卒業、1984年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了。1986年アメリカ、コーネル大学大学院修了。同年より東環境・建築研究所代表取締役。

あずま・たかみつ 建築家（1933–2015）／大阪大学工学部構築工学科卒業後、郵政省建築部を経て坂倉準三建築研究所入所。1967年に独立、翌年、東孝光建築研究所設立。

塔の家

東孝光

建物内を壁から持ち出して設けた階段が
巡る。完成時、脱型したままの打ち放しコン
クリートが時間とともに味わいを深めている



前面道路からの見上げ。壁梁をまわしたり、庇の先を下がり壁にしたりして、外部空間を内側に囲い込んでいる



バルコニーのある最上階は屋根なりに南向きの勾配がついた部屋。当初のステールサッシは、木製サッシに取り替えられている

半世紀を超えて ますます高まる評価 敷地6坪に屹立する 都市住宅の金字塔

東孝光氏（1933-2015）の設計で1966年に完成した自邸。「都心に住む」というコンセプトを掲げて約6坪の敷地を購入し、ひとつながりの立体的空間の都市住宅をつかった。「狭小住宅」「都市住宅」「コンクリート打ち放しの住宅」の先駆けだが、近年はそうした枠組みを超えて、建築史に刻まれる文化財としての評価も高まっている。2003年に「DOCOMOMO JAPAN選定 日本におけるモダン・ムーブメントの建築」に、2017年度には「東京都選定歴史的建造物」にも選定された。2015年に孝光氏が亡くなったあと、この家で育った一人娘の東利恵氏が引き継いでいる。

——このエリアも建て替えや再開発が進んで、昔の面影が薄くなってきましたが、塔の家はいまも竣工当初と変わらない佇まいですね。

東 私が子どものころ、塔の家の前の外苑西通りは走る車もまばらで、のんびりした雰囲気でした。確か、竣工当時は街路樹もまだなかったと思います。

当時、父は坂倉準三建築研究所（現・坂倉建築研究所）で「新宿西口広場・駐車場」（1966）を担当していて多忙でした。この小さな敷地を購入し、図面を描いてみたものの、本当に建つのかどうか不安で、夜中にここにやって来て、地面に線を引き、納まるかどうか確かめていたそうです。



1

「狭い」と思ったことはない。6坪の敷地で、「都市に住む」という意図を具現化する過程では、理屈だけでなく感覚に依ったところも大きいと思う——東

塔の家は、父自身が何度も手を入れてきましたが、基本的には変わっていません。躯体のコンクリートはいまも健全です。壁厚150mmでシングル配筋の箇所も多く、「かぶり厚」が大きいんです。当時はコンクリートの質もよかったですから、大きなクラックや爆裂などが起こったことはありません。外壁を高压洗浄してシールを打ち直したことはありますが、建築的に大がかりな修繕はしていません。

そもそもあのころは住宅でコンクリート打ち放しということ自体が珍しくて、大工が「仕上げができないなんてかわいそうだ」と気の毒がって、板目の型枠を使ってくれました。その型枠で打った躯体はいまもそのままです。

では中へ入りましょうか。

靴履きで暮らした デコボコのコンクリート床

東 玄関を入った2階が我が家のLDKです。キッチンにある造り付けテーブルとシンクは竣工当時のオリジナルです。私が子どものころは、このテーブルのシンクに近いところが母の席で、そ

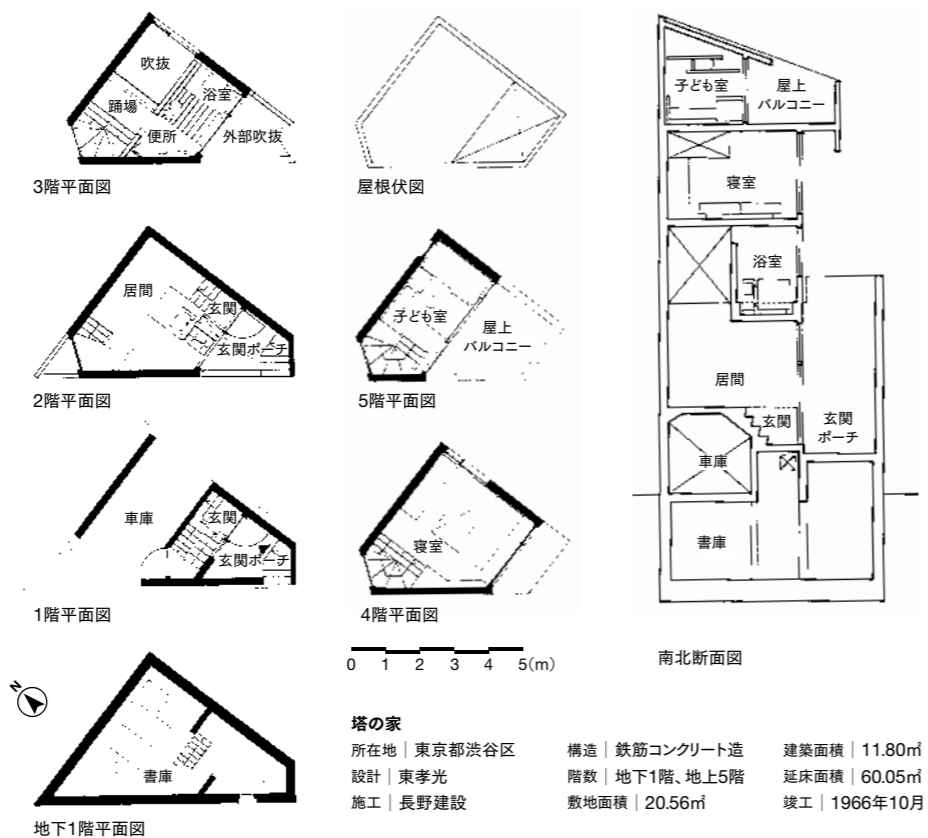
のはす向かいに父、そして私は両親に挟まれてテーブルの角に座って食事をしていました。母はとともきれいで、料理をつくりながら食べて、どんどん片付けていく人でした。ぼやぼやしていると片付けられてしまうから食事は真剣でした。

六角 天井と壁にオリジナルと思われる配管が露出していますが、キッチンまわりの設備や内装はどのくらい手を入れてきたのですか。

東 配線や一部の配管は躯体に埋め込んであったりして更新が難しく、オリジナルのままです。給湯器やガス台などの設備機器は当然、変えています。あとは家具が変わったくらいです。造り付けの戸棚は、初めはラワンでしたが、その後、父が戸棚を工場に持って行ってシナのフラッシュで作り直してもらいました。いまの3代目は私がヨーロッパアンティークでつくってもらったものです。

六角 床は初めから板張りですか。

東 いえ、初めは床も階段も、左官で仕上げしていないデコボコのコンクリート打ち放しでした。予算も時間もなかったので、躯体を打って、トイレや風呂などの設備が入ったらすぐに引越したのです。家具をつくったのは入居後でした。



床がデコボコのコンクリートだったので、しばらくは靴を履いての生活で、子どもの私にとっては外国みたいですごく楽しかったですよ。

六角 住宅で打ち放しの荒々しい床は、生活のなかでなかなかのテクチャーですね。

東 その後、樹脂製のロールシートを買ってきて床に置きました。母は裁縫をしていたので、型紙を切るように床の形に合わせて裁ち紙でザクザクと切って置いていったんです。

床を板張りにしたのは、父が還暦を過ぎてからです。終の住処として長く住めるようにということで、床暖房を入れて板張りにしました。樹脂を張った床は、いまも階段に残っています。では上階に上がっていきましょう。階段の踏面はデコボコしているので気をつけてくださいね。

まちがにぎわう将来を見越して 窓の外側から囲い込む意匠に

東 2階のLDKから3階までは吹き抜けで、私が使っていた最上階の5階までは階段室で空間がつながっています。

竣工後30-40年くらいたったころ、床やサッシなどを住まいながら変えていきました。当初、開口部はスチールサッシでしたが、サビが進んで開け閉めが難しくなったので、エアタイトの木製サッシに入れ替えました。

六角 各階の開口部が、前面道路から少し角度を振っているのがいいですね。

東 大きな開口部は真南に向いています。昔はまわりの建物が低かったから景色が開けていて、休みの日などはカーテンを開けて、両親のベッドに寝転んで本を読んだりしていました。いまは街路樹が大きく育って、夏は気持ちのよい木陰になります。

六角 4階の底の先端が、下がり壁になっているのは、日射調整と水切りを兼ねて視界を操作する意図があったのでしょうか。内外の境界が開開口部ではなく、外側の下がり壁まで内部からつながった空間フォルムで構成されていますね。



5



2



3



4

東 内外を曖昧につなげた感じです。前の道路はいずれにぎやかになるだろうと考えて、窓先の外部を内側に囲い込むようなデザインにしたのだと思います。そうした曖昧なつながりは、間仕切りのない立体的な内部空間にも通じるつながりがあります。

コンパクトな立体空間に 日本家屋に通じる「気配」

六角 これまで目にした紙面の写真から、塔の家には洞窟のような少し暗い深いイメージを抱いていたのですが、四方から自然光が入り込み明るさがあり、鉄筋コンクリートの荒い壁面の陰影を浮き上がらせています。しかも内部は立体的につながって縦方向に抜けがあり、床面積の小ささから想像する「狭さ」を感じさせない豊かな空間だと感じました。

東 実際に暮らしていて「狭い」と思ったことはありません。私にとって塔の家は、ずっと普



6

通の家でした。なので、若いころに友だちの家などを訪ねたとき、それが小さく部屋が仕切られた一般的な住宅だったりすると、「わあ狭い」と感じたくらいです。

よく話すことなのですが、塔の家の空間には、昔の日本家屋と同じような「気配」の感じられ方があります。ひとつながりの立体空間で、直接お互いは見えないけれども、音で気配が感じられるんです。

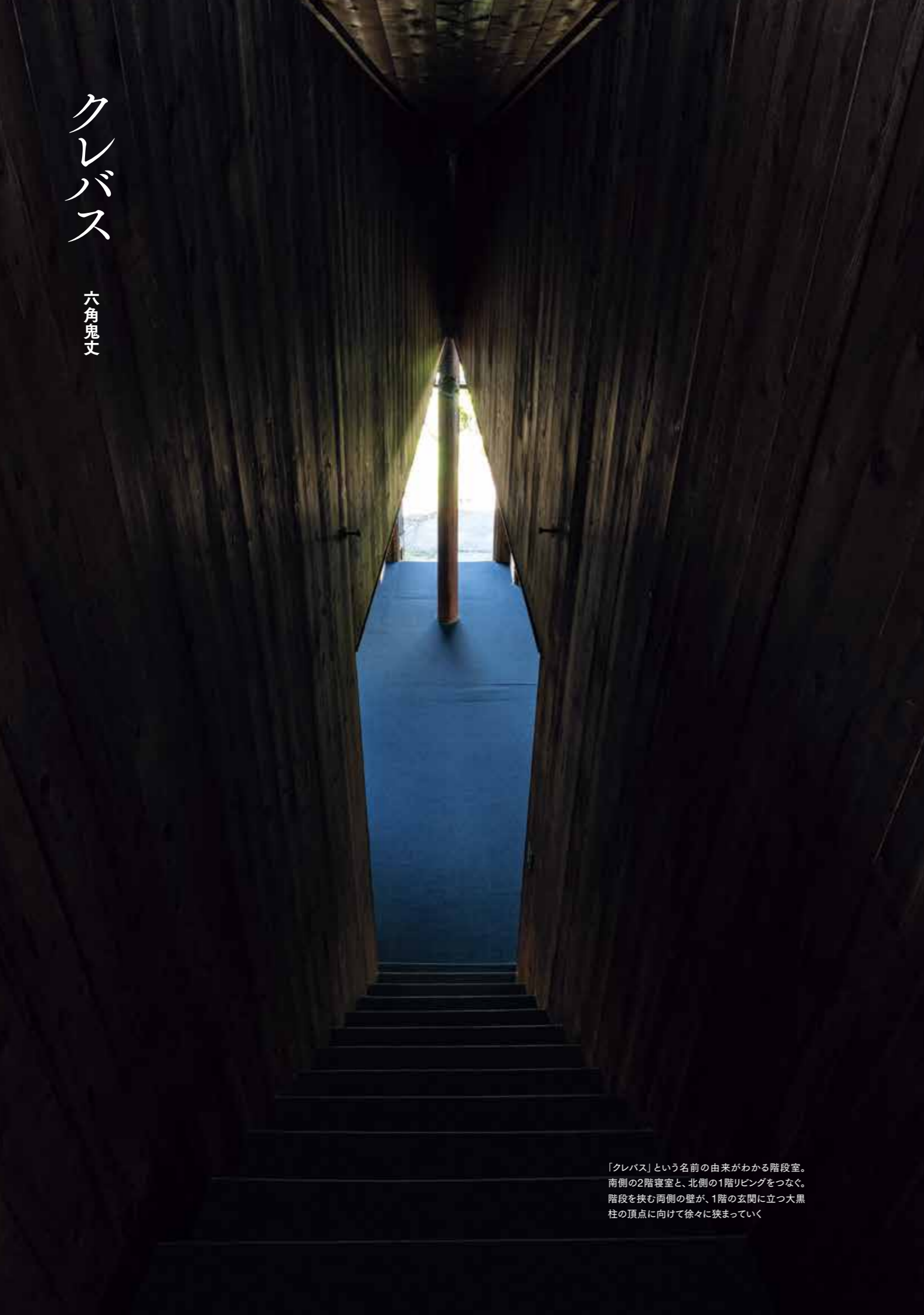
きっと理屈だけで考えたら、こういう住宅にはならなかったでしょう。「都心に住む」「まちに住む」という明確なコンセプトを、限られた敷地のなかで具現化する過程では、理屈をこらつつ感覚に依ったところも大きいと思います。

六角 確かに、身体感覚的なところが感じられます。それが空間の強さなのでしょう。設備などは時間とともに変わるけれども、どんなものが新しく入ってきても保たれる空間の強さがあるとと思います。

- 1 外苑西通りの向かいから見た全景。周辺の建て替えが進み、塔の家を超える高さの建物が増えた
- 2 2階のキッチンまわり。テーブルとシンクは竣工当時のオリジナル
- 3 3階は吹き抜けに面してベンチがある。右手は外部吹き抜けに面した浴室
- 4 2階の吹き抜けになっている2階LDK
- 5 東孝光氏夫妻が寝室にしていた4階。街路樹を望む開口部がある
- 6 吹き抜けから2階のLDKを見下ろす

クレバス

六角鬼丈



「クレバス」という名前の由来がわかる階段室。南側の2階寝室と、北側の1階リビングをつなぐ。階段を挟む両側の壁が、1階の玄関に立つ大黒柱の頂点に向けて徐々に狭まっていく



2階の寝室。高い天井いっぱいの開口部がある。内装は竣工当時と変わらない。両側に見える収納下にキャスター付きのベッドが納まっている



当初は若夫婦のリビングとして、鬼丈氏の独立後はアトリエとして使用した1階

既成概念を離れた V字形プラン 「野武士世代」の 先陣を切った都市住宅

六角鬼丈氏（1941-2019）が磯崎新氏の事務所勤務していた26歳のとき、自邸として建てたデビュー作。実家の母家に増築する形で建てた、地下1階・地上2階建ての木造住宅。従来の住宅プランの既成概念を離れ、光や風を呼び込む「環境装置」となる隙間（クレバス）を挟むV字形プランを打ち出した。その後、建築界で一世を風靡した雑誌『都市住宅』創刊号（1968年5月）にも掲載された。のちに楨文彦氏が「野武士」と称した世代の建築家の代表作のひとつとして近年、評価を高めている。

——「塔の家」が地域のランドマークのように目に留まる存在なのに対して、「クレバス」は道路からは目にするのできない場所に立っています。まずは六角美瑠さんにこの敷地とクレバスの生い立ちを伺いましょう。

六角 この敷地は、いわゆる旗竿地で、前面道路側に母家が、奥にクレバスがあります。現在の母家は20年ほど前に建て替えたもので、1967年当時の母家は、昭和初期に建てられた古い建物でした。クレバスは、その古い母家に増築する形で、若夫婦の住まいとして建てられました。

東 1967年完成ということは、塔の家と1年しか違わないんですね。

六角 クレバスは敷地の外からは見えませんが、庭に立つと外観がわかります。南側には庭から出入りできる半地下があります。

外観は、初めはスギ板張りでしたが、吹き付け塗装に変更し、トタン屋根は、鋼板屋根に葺き替えています。

東 隣接する母家とはつながっているのですか。

六角 当時の古い母家も、建て替えた現在の母家も、1階部分でつながっています。

南の庭から見ると3層ですが、玄関のある北側は1層です。その間をクレバスの空間が対角に入り込んでいます。玄関を入ると、目の前に大黒柱が立ち、クレバスを見上げる空間があります。この家ができた翌々年（1969年）に父が磯崎アトリエから独立し、一時期この部屋をアトリエとしても使っていたそうです。私は竣工してから10年後に生まれました。

東 美瑠さんは、この家で育ったのですか。

六角 そうです。子どものころは、この大黒柱によじ登ったり、天井から吊るしたハンモックやプランコに乗ったりしてクレバスの空間を楽しんでいました。

敷地に素直に開いたV字形プラン 隙間が光の差し込むクレバスに

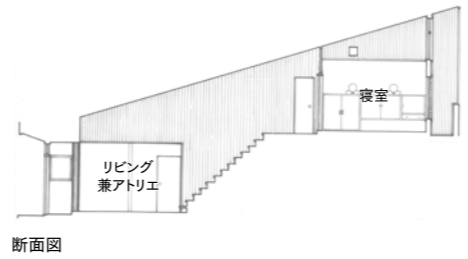
六角 ここにあるオリジナルのプランを見ると、クレバスと名付けた理由がわかります。

この家は、母家と西側の敷地境界線の間であり、2つの細長い長方形をV字形に配置したプランです。母家と敷地境界線が平行ではなく、角度が振れているのがV字形の理由です。双方のラインそれぞれに平行する2つの長方形を配置して素直に開いた結果、V字形プランになったのです。1つの長方形は母家の西面に沿ってくっつける形で、もう1つの長方形は西側の敷地境界線と平行に配置されています。生前、父が説明していたように、V字形に開いた隙間が「クレバス」なのです。

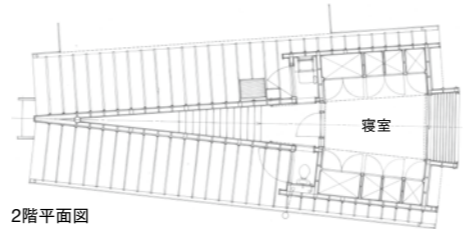
東 外形は変則のV字形だけど角度があるのはクレバスの部分だけで、各部屋は整形な長方形の部分に入っているんですね。

1階から見上げると、クレバスの部分にある階段を通じて2階から入ってくる自然光がすごく印象的です。上から差し込む光をクレバスで絞ることで自然光を強調したのでしょうか。

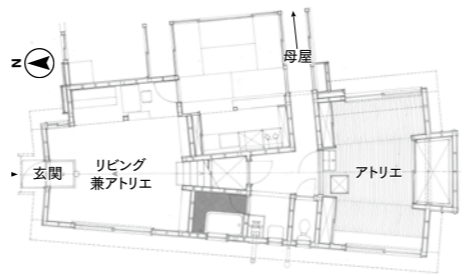
六角 2階の窓は南向きのため、晴れた日中は強い日差しが象徴的にクレバスに差し込みます。曇りの日は薄明かりとなり、クレバスの光のグラデーションも変化し、表情があります。一方、夜は暗く深い闇がパースペクティブの広がり先の先に無限に続いていくように感じますし、満月の晩には窓にちょうどよい感じで月が入り込むことがあり、月明かりのクレバスの表情も幻想的です。



断面図



2階平面図



1階平面図 S=1:250



3



4



5



6

夜になって2階の寝室に行くのに階段を上っていくと、クレバスを通じて“下界”の日常から切り離されるような雰囲気があった——六角

光と風を呼ぶ「環境装置」 “下界”から離れた浮遊感も

六角 父は「クレバスは環境装置でもある」と言っていました。風も抜けるし、光も呼び込む。1階の会話が2階にも届きます。対角の距離も小さい家ながら長く、上りは空に向かって広がりのある空間体験ですが、下りは「消失点」に向かってパースペクティブが効いています。

東 クレバスはかなり意図的に計算してつくられている印象を受けました。たとえば、経験がないとなかなかわからない光の見せ方を、開口部のつくり方を含め、きちんとデザインしています。平面図を見ただけでは想像できないところが、実際に体感するとよくわかりました。当時、まだ若かった六角さんがどこまで意識して設計したのか、興味のあるところです。

六角 子どものころ、夜になって眠るために2階に上がっていくと、日常から切り離されるような感じがしました。利恵さんも塔の家の最上階が個室でしたが、階段を上がりながら“下界”から離れていくような雰囲気は感じませんでしたか？

東 塔の家の立体空間には一体感があるせいか、そういう感覚を抱くことはありませんでした。ときどき「どこが一番好きな場所か」と質問されるのですが、空間全体で暮らしている感覚なので、特別な場所を挙げられないんです。強いて言えば、塔のてっぺんは「お姫さまが閉じ込められる部屋」と思って寝ていた感じでしょうか。

父から引き継いだ名作住宅 さらに次代に残す方法を模索

——お2人とも、自分が育った「普通の家」を引き継いでいて、それが世の中で高い評価を受けるようになりました。今後、どのように残し、次の世代にバトンを渡していくのか。そのあたりを考えることはありますか？

東 塔の家の竣工から半世紀以上がたちますが、父が体調を崩した直後、誰も住んでいない期間が約半年ありました。すると、家に入ったときの空気が違って、家が生きていない印象を受けたんです。家は人が暮らし、空気を動かさないと荒れはじめると実感して、再び私が住むことになりました。やはり住宅である時間をできるだけ長くすることが大事です。

とはいえ、私は独りっ子で、子どももいないので、いずれは誰かに引き継ぐことになります。そこで「誰ならば住めるのか」を知るために、私の事務所で「適任」と思われるスタッフに声をかけ、私に代わって賃貸で住んでもらうことにしました。スタッフが住んで5年になりますが、いろいろと工夫して暮らしてくれています。

六角 ミュージアムのようなかたちでの活用を考えることはありますか？

東 設備の更新が難しくなったり、老朽化が進んだりして、住むのが難しくなる可能性はありますが、見学施設のようにするかどうか、まだ具体的な考えには至っていません。

クレバスは母家があるので、資料館や美術館などに活用する方法もありそうですね。

六角 母家があるので、敷地全体のなかでどう考えていけばよいのか、模索しているところ

です。

私も建築界にいたので、あの時代を象徴する作品の一つとして、この空間を維持し継承していきたいです。そして、いずれ私が世を去ってもクレバスは残ってほしいと思っています。使命感にも似た思いと、敷地を含めて維持していく大変さを実感するようになったのは、2019年に父が亡くなったことが大きいですね。

父はまだ明確に位置付けされていない建築家なので、ドローイングや模型など多くの資料を整理していくなかでクレバスを生かすことも考えていきたいです。まだ具体的なイメージは描けていませんが……。

東 相続税の負担が重すぎたりして、次の世代が持ち切れなくなっていますよね。よく指摘されることですが、イギリスなどではリニューアルして価値を高めながら住み継がれてきた住宅のほうが、新築よりも不動産として高く評価されたりします。たとえば、50年以上にわたって維持され、社会的に価値が認められた住宅は税制面で優遇されるとか、住宅遺産として活用の道が開かれるとか、何らかのサポートが必要ですよ。

そして、これは私たちだけの問題とは限りません。名作住宅を引き継いだ建築家の後継ぎや、設計事務所のOB、OGが、実はたくさんいます。そういう時代に突入していることを、広く社会で認識してほしいと思います。

松浦隆幸 まつうら たかゆき
編集者、ライター／1966年東京都生まれ。1990年東京理科大学工学部建築学科卒業後、日経BP入社（日経アーキテクチャー記者）。1994年退社。農業生活などを経て、2005年に編集事務所オン・ザ・ロードを設立し、現在に至る。



1

- 1階リビングを、階段の足元から玄関方向に見る。プランは階段を中心線とする線対称
- 1階から見上げる階段。2階の大開口から入る自然光が、クレバス状の階段に差し込んでくる
- 2階の壁に取り付けられた照明器具はオリジナル。屋外用の外灯照明器具を使用
- 2階寝室の東西面にある小さなハイサイドライトも竣工当時からあるもの
- 階段を上り切ったところにある2階のトイレ。当初は赤と青の色ガラスだった
- 2階からの光が届く1階で談笑する東氏と六角氏



2

クレバス

所在地 | 東京都杉並区
設計 | 六角鬼丈
施工 | 渡辺工務店
構造 | 木造
階数 | 地下1階、地上2階
敷地面積 | 536.25㎡
建築面積 | 60.40㎡
延床面積 | 106.90㎡
竣工 | 1967年5月

吊り構造による超免震システム

高橋 誠一は、自分の「老い」についてまったく無頓着な人でした。90歳も過ぎた最晩年に「そろそろ俺は事務所の若いやつを何人か連れて、独立しようかな」などと半ば本気で言うくらい、建築をすることと年齢は一切関係がないと思っていたようです。

加えて、何か記録に残すこともほとんど関心がありませんでした。記録を見直して他人に説明をするとか、自分の作品集をまとめるとか、そういうことにはおよそ興味がなく、手がけていたプロジェクトが完成したら「よし、じゃあ次は何をやるうか」という感じで、いまの自分がやろうとしていることがすべて。本人としては、これまでたまたま取り組んできたことが、偶然、建築として残ったに過ぎず、これが集大成だと言えるような特定の作品も挙げることはできません。ですから遺作についても、まわりの人間が勝手に位置づけをするくらいが、ちょうどいいのではないかと考えています。

高橋が建築設計の実務を離れてから亡くなるまでの間、妄想のようにずっと考えていたのは、従来の構造とはまったく異なる超免震システムです。「S.F.S.21 (Seismic Free System 21)」と名づけられたこのシステムは、建築の真ん中を貫く芯棒の頂点に、地震時の変形を絶縁する装置をもったコンクリートシャフトが設置され、そこからケーブルで居室部分が吊り下げられた構造で、やじろべえの原理が参照されています。このシステムを採用して、「清水建設技術研究所 安全安震館」(2006)が実現していますが、高橋自身はこのあとさらに規模を大きくした高層建築の構想など、いろいろな実践を考えていたようです。

高橋は少年のころから飛行機が好きで、その設計がやりたくて、中学校を卒業すると横浜高等工業学校の航空機科に入ったほどでした。建築家になってからは、自動車が大好きでしたね。そういう意味では、最終的に超免震システムのような機械的な合理性を突き詰めた建築を考える方向へ至ったのは至極当然なことだったのかもしれない。

高橋はバックミンスター・フラー (1895-1983) のことも好きでした。彼の建築は、「ジオデシック・ドーム」にしても「ダイマキシオン・ハウス」にしても、機

「清水建設技術研究所 安全安震館」。従来の免震構造とは異なる、新しい長周期免震システム「S.F.S.21 (Seismic Free System 21)」(塔頂免震)をグループで共同開発し、実現した建築。S.F.S.21は、直下型から海洋性の大地震まで、幅広いタイプの地震に対応可能な免震システムで、大規模建築での活用も、実験により実証済み [写真：新建築社写真部]

械的な発想に基づいていますよね。高橋が学生のころはもう機械のように建築をつくるという発想は流行らなくなっていたと思いますが、ああいうことを本当はずっとやりたかったのでしょうか。

環境と一体になってできていく建築

高橋は、感覚でつくっていくという設計手法をあまり好みませんでした。外から見れば、自己を中心として建築のかたちを決めていくやり方を取っているように映っていたかもしれませんが、実は自然の環境や文化的な文脈となじんで一体となってできあがっていくようなやり方に対する憧れをもちつづけていたと思います。

そういう手法が臆面もなく取れるようになった

「群馬県立館林美術館」(2001)以降は、晩年の境地が現れていると言えるのではないのでしょうか。あるとき高橋が「本を書こうと思う。タイトルだけ先に決めた」と言って、「ハリボテ建築のスヌメ」という題名を教えてくださいました。結局その本は書かれなかったのですが、その「ハリボテ」を突き詰めた究極のかたちが、館林美術館に現れているのではないかと考えています。何かを構築するという考え方ではなくて、シーンを少しづつつくり出すことで生まれるシークエンシャルな体験や、日が昇って沈むという時間の変化、あるいは地形や水のようなランドスケープ・環境といった「動くもの」が空間におよぼす影響に初めて目が向いた建築でした。

似たようなことは、「白河市立図書館」(2011)

S.F.S.21 (Seismic Free System 21) の計画案のひとつである「Project-N」の模型写真 [写真：GA photographers]

建築家の〈遺作〉| 14 高橋 誠一 「S.F.S.21」

談 | 高橋 真 (高橋真建築設計事務所)

取材・文 | 磯 達雄

飛行機好き少年の夢

日本の戦後建築界を代表する建築家を1人ずつ採り上げ、その関係者に〈遺作〉となる建築を挙げてもらいながら、建築家の晩年の思想について振り返るこの連載、第14回は高橋 誠一を採り上げる。通信省営繕部設計課を経て、1960 (昭和35) 年に林昭男氏らと第一工房を設立。大阪芸術大学、中部大学、東京都立大学などのキャンパス設計では、古くからある都市の魅力とも通じる魅力的な空間を連続的に実現させた。コンクリート打ち放しの仕上げや、階段まわりのディテールなど、いずれの作品にも、建築通をうならせる見どころがちりばめられている。そんな高橋が晩年に取り組んでいたのは、最新の技術を採用入れた構造システムの開発だった。高橋氏の長男で、自身も建築家である高橋真氏に話を聞いた。



高橋 誠一 たかはいていいち 建築家 (1924-2016) / 主な作品に「大阪芸術大学 (第1-14期)」(1966-1986)、「佐賀県立博物館」(1970)、「中部大学 キャンパス整備計画」(1976-2015) がある。[提供：高橋 真]



にも言えて、これも遺作のひとつと言えるでしょうね。箱のまわりに大屋根を巻きつけるようにして建築をつくる発想には、高橋らしい特徴が現れていると思います。

もともと高橋の建築は、ある種の構成のなかから建築をつくりあげるような手法を取っていましたが、あるときからは、構築するものと被覆するものがはっきりと二分される構成に変化してきた気がするのです。以前、高橋がこんなことを言っていました。

「木造建築は大変だ。あれは骨組みを一つひとつ全部描かないといけな。それに比べてコンクリートは簡単だよ。外と内の線を1本ずつ描けばできるだろ」。

極端な話ではありますが、言い得て妙だと思います。内と外にしか線がなくて、ぎっしりと充填された2本の線の間は技術の世界の話。人間の感覚に訴えるような世界は2本の線の表側だけで、建築家が必死になってとり着くのは、この2本の線だという言い方に聞こえたんです。それがとても面白いなと思いました。

群馬県立館林美術館や白河市立図書館で

は、自然環境や地形といった逆らえないものに対する柔軟さや諦めが出てきた半面、「S.F.S.21」ではそういった発想とは異なる技術や機械の設計について最後まで考えたということになります。土地にしか建築はできない、しかしその一方で建築は土地を必要としない。現実と妄想を行き来するような、すごく対極的なことをやりつづけていたんですね。

設計事務所の第一工房は、高橋と林昭男さん(1932-)が中心となって設立された事務所です。建築家の個人名は冠していないけれども、いわゆる組織事務所とも違う、総合設計事務所として協働していました。晩年になると、スタッフ全員の技術レベルが上がってきて、組織事務所でもなかなかできないようなことを、実現する能力が高まっていました。

高橋にとっては、第一工房と一緒に設計をすることが絶対に必要な条件でしたし、おそらく第一工房にとって高橋は欠かせない存在でした。互いになくはない関係で、影響もずいぶん与え合ってきました。ですから、高橋誠一の遺作は、第一工房の遺作でもあるのだらうと思います。

上下の関係を嫌って若者と交流

1997(平成9)年に「パークドーム熊本」をフジタと共同設計しました。そのときに提案した風船型ドームのシステムを製品化しようとして、フジタのエンジニアや構造設計者と、竣工後に何度もラウンドテーブルと呼ばれる場を設けていました。人が集まって分け隔てなくいろんな意見を言い合い、製品を開発していくのが、楽しくて仕方なかったようです。

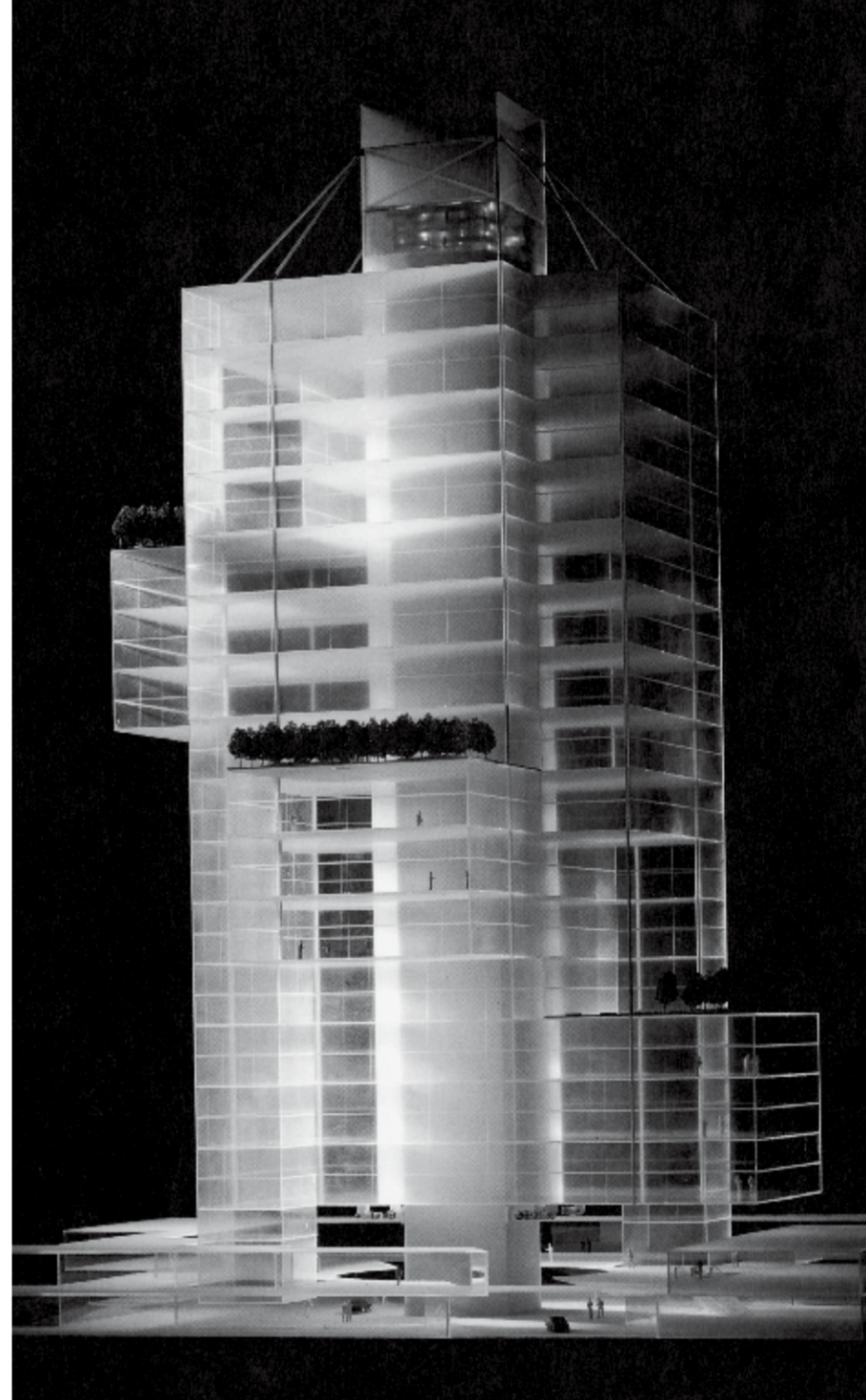
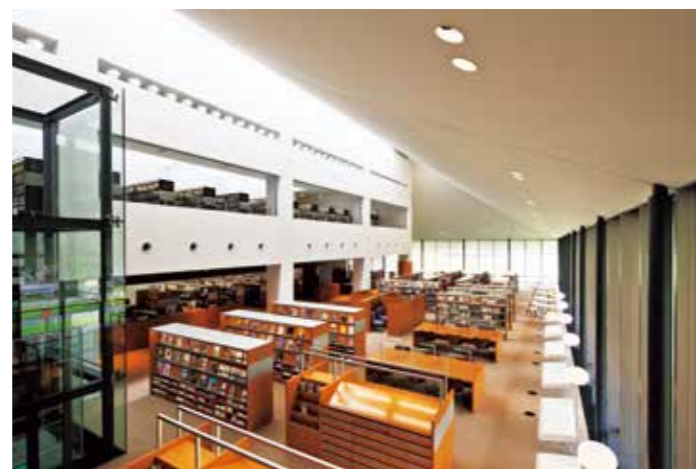
以来「ラウンドテーブルが重要だ」といって、「S.F.S.21」の開発時にも清水建設の技術者や東京工業大学の和田章先生(1946-)、竹内徹先生(1960-)を交えてプロジェクトチームをつくり、超免震を実現するための議論を繰り返していました。ひとりで黙々と考えてつくるよりも、実現に向けてみんなでディスカッションしながらものづくりを進めていくのが好きだったのです。誰でもいいというわけでもなく、それぞれに能力を持った人たちが、同じ目標を掲げてチームを組むことが重要でした。高度な、けれど総合設計事務所である第一工房での仕事とは異なるタスクフォース的な協働が楽しかったのではないかなと思います。



1



2



3

チームで建築をつくることを目指したという意味では、日本設計を設立した池田武邦さん(1924-2022)と近いところがあります。池田さんと高橋は、生涯の友人関係でした。似ているけれども、違うところもあります。池田さんはもともと船乗りで、艦隊を率いる艦長、全軍を動かす司令官のような役割を得意とされる方です。一方、高橋は最後までプロジェクトチームの長でした。実動部隊の中にいることを好んだのです。

だから、若い世代の人たちとの関係でも、祭り上げられて上下の距離ができることをすごく嫌っていました。「高橋先生、指導にあたってください」なんて言われると、「俺はフロントに立っているだけで、一緒にやっているんだ!」と憤慨

していました。そういう気概をずっともっている人でした。若者と交流するときにはいつも気をつけてまわりを観察し、自分から近寄って絡んだりしていました。

高橋は議論でも、設計でも、施工でも、とにかく現場が大好きでした。だから、最後の最後まで現役の建築家でいつづけたのではないのでしょうか。

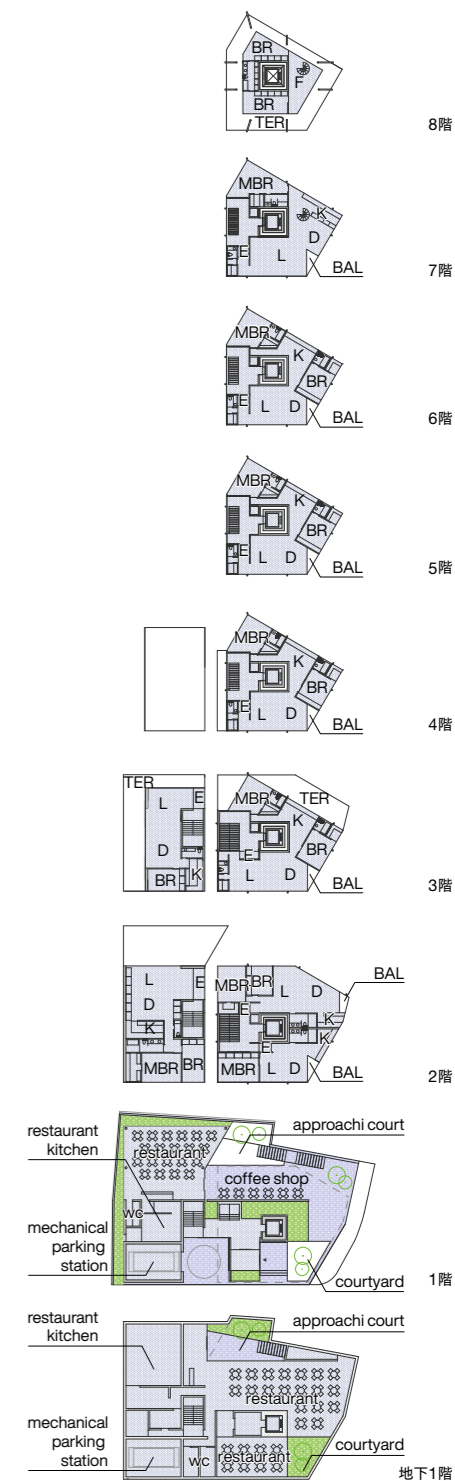
高橋 真 たかは・まこと
建築家/1954年東京都生まれ。1979年早稲田大学理工学部建築学科卒業後、内井昭蔵建築設計事務所入所。ゴットフリート・ベーム建築事務所、機崎新アトリエでの勤務を経て、1992年にMTA/株式会社高橋真建築設計事務所を設立。

磯 達雄 いそ・たつお
建築ジャーナリスト/略歴は15ページ参照

- 群馬県立館林美術館 [写真: 新建築社 写真部]
- 白河市立図書館 [写真: 小川重雄]
- S.F.S.21 (Seismic Free System 21) 計画案の模型写真。このモデルは、ギャラリー・間で開催された「高橋誠一/第一工房展」(2003年11月22日-2004年2月7日)にあわせて制作された [写真: 藤塚光政]

S.F.S.21 (超免震技術の開発)

設計 | 第一工房(高橋誠一・布施茂・伊原洋光)、清水建設、新日本製鐵、和田章、オーヴ・アラップ・アンド・パートナーズ・ジャパン
計画 | 2000年



S.F.S.21 (Seismic Free System 21)「Project-N」平面図
S=1:900 [提供: 第一工房]

新世代・事務所訪問 | 17 ウミネコアーキ

ナビゲーター | 門脇耕三 (明治大学准教授)

次世代のプロジェクトが胎動する、建築家のワークスペースを訪問するシリーズ。そこで展開している活動の、あるいは生き方の独自のスタンスに触れながら、新しい建築の姿を捉えていく。

多様なスキルの仲間とともに 地域のデザインに挑む

建築設計はもちろん、不動産運営や事業企画まで手がけるウミネコアーキ。その若き主宰者である若林拓哉は、まるでロールプレイング・ゲームの主人公のような、一風変わったやり方でキャリアを積み重ねてきた。大学院を出てすぐに、自分の事務所を設立。同時に、実績ある建築家の事務所のパートナーに就任。働き方はプロジェクト契約で、足りないスキルを補いあうのが目的。まるでゲームのなかでパーティを組むかのようだ。パーティで挑む冒険＝プロジェクトで得られるのは、新しいスキルと経験値。若林はみるみる成長して、自身が主宰するパーティ＝ウミネコアーキも大きくなった。ウミネコアーキは、まさにパーティとしての事務所だ。それぞれ別の仕事をもったメンバーが、得意なスキルを持ち寄ってプロジェクトに挑む。だから建築設計を超えた領域もカバーすることができる。若林たちのパーティはいま、建築を超えて、地域そのもののデザインに乗り出している。(門脇耕三)



ARUNŌ -Yokohama Shinohara-

1975（昭和50）年築の旧・横浜篠原郵便局を改修した地域の文化複合拠点。ウミネコアーキでマスターリースし、企画から設計・不動産企画・運営までを担う。フローズンカフェバー、シェアキッチン、棚貸しスペース「マドグチ」、シェアラウンジ、屋外出店スペース、シェアハウスを複合。機能を細分化させることで、かわりしるを増やし、人々が気軽に足を運び、連携しながらやりたいことに挑戦できる仕組みとしている。既存建物の工業的な質感を活かした構成や仕上げが特色。鉄骨の柱梁を現しにした一体空間に、入れ子状の木造のボックスや屋台を思わせる仮設的なしつらえを配し、流動的な集いの場を実現している。

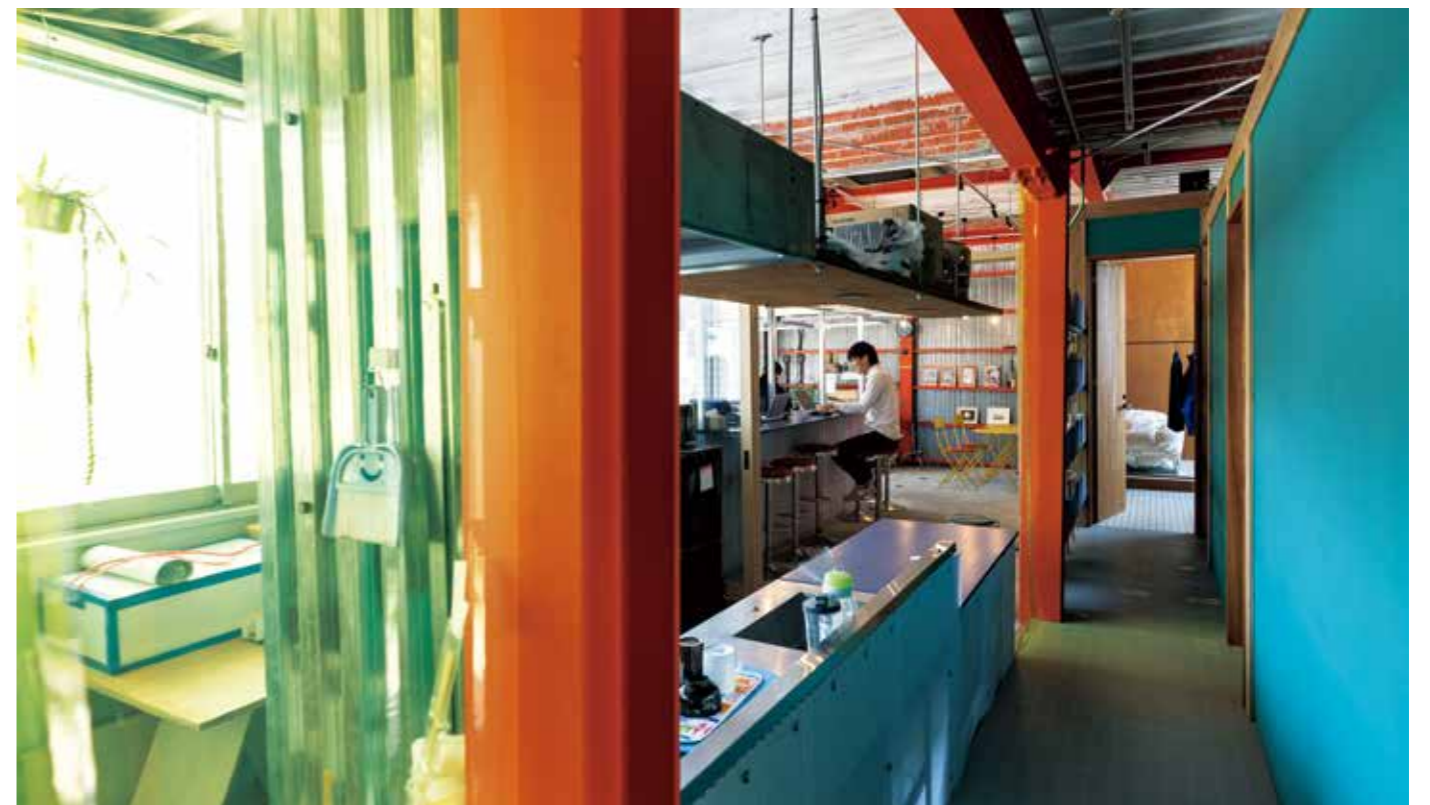


1



2

- 1 フローズンカフェバーとシェアキッチンが共存する厨房。フローズンカフェバーは、ウミネコアーキのパートナーで地元で不動産コンサルティング会社を営む山本ルリさん（厨房奥）が運営も担う。カウンターに腰かけるのは経営面を担うウミネコアーキの“相方”小泉郁貴
- 2 シェアラウンジ。コワーキングスペースや教室などに利用できる。奥は設計メンバーの石毛龍
- 3 シェアハウスの廊下とキッチン
- 4 入れ子状につくられたシェアハウス住戸。全2部屋ある
- 5 ディテール。郵便局の即物的な構造美を活かして改修
- 6 元郵便局ほぼそのままの外観。駐車スペースは屋外出店スペースとしても利用される。左は冷凍自販機



3

ウミネコアーキは代表・若林拓哉の出身地、横浜市港北区篠原町を拠点とする事務所だ。建築設計のみならず、コンセプト企画、不動産業、施設運営など、建築やまちづくりにまつわる業務を総合的に担う。2022（令和4）年には事業計画から運営まで手がけ、郵便局を改修した複合施設「ARUNŌ」を開業。住民や小規模事業者などの活動拠点として根付きつつある。

驚かされるのは、必要なスキルを獲得し、次々と実践に移す展開力だ。2016（平成28）年に大学院を修了した若林は直ちに自らの事務所を立ち上げ、同時につばめ舎建築設計のパートナーとして実務経験を積んだ。担当した職住一体型の賃貸集合住宅「櫻の音terrace」で設計・施設運営スキルを習得した若林は、地元で「ARUNŌ」を皮切りに複数のプロジェクトに着手する。若林の祖父が建てた店舗付きアパートを再生する「新横浜食料品センター」プロジェクトが2024年中の開業に向けて進行中。2棟18世帯の集合住宅の新築プロジェクトも実施設計段階にある。

ウミネコアーキのメンバーは、全員パラレルワーカーだ。多様なスキルをもつ人材が集い、仕事を分担する。柔軟な組織は小さな規模から堅実に、思い描いた都市や建築のビジョンを実現するため。地域を基盤としながら、視野を広げ、軽やかに動く。その着実な進展が頼もしい。



4



5



6

若林拓哉略歴および事務所変遷

1991年
神奈川県横浜市生まれ

2014年
芝浦工業大学工学部
建築工学科卒業

2016年
芝浦工業大学大学院 建設工学専攻
修士、水辺総研に勤務

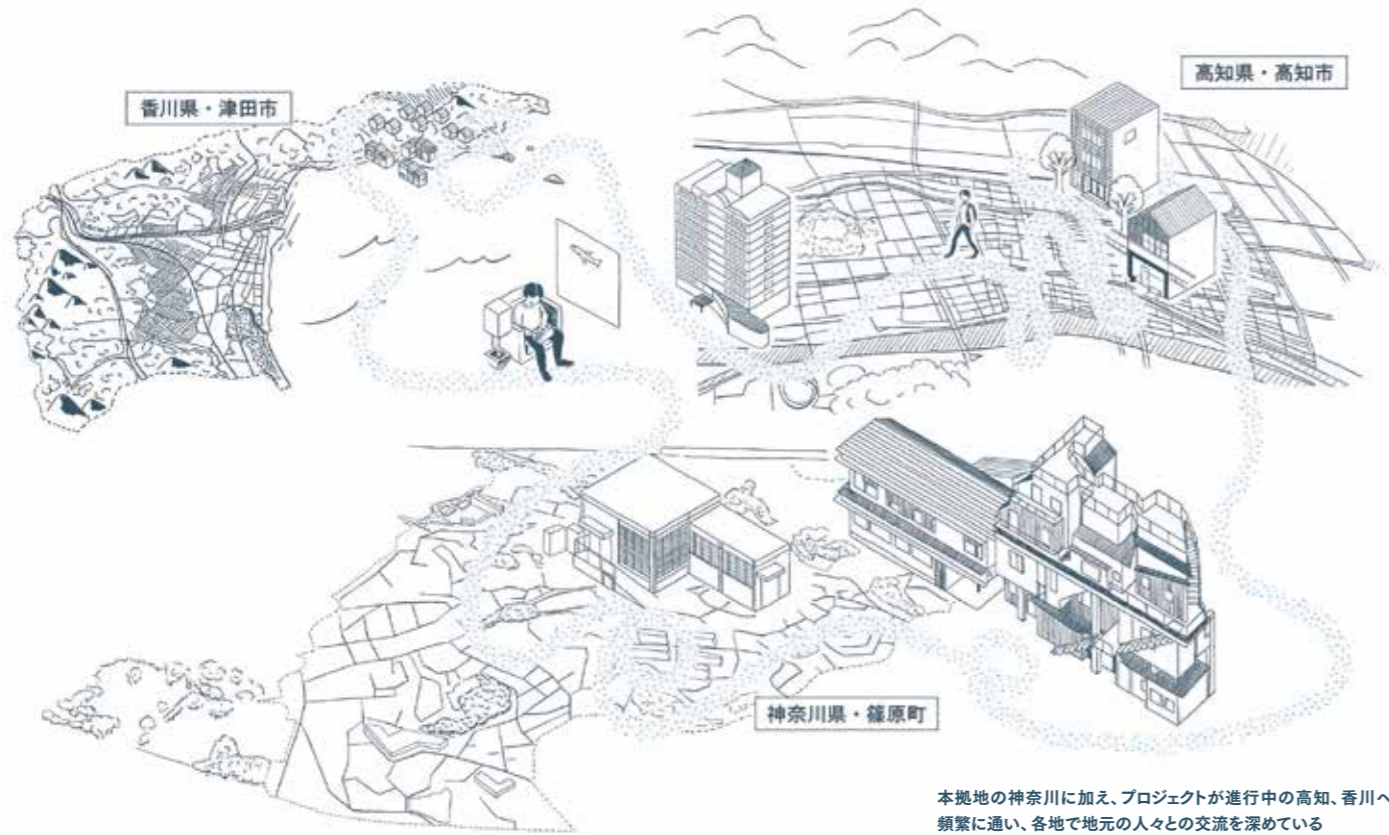
2016年
ウミネコアーキ設立、
つばめ舎建築設計パートナー

2021年-
株式会社NODパートナー

2022年
株式会社ウミネコアーキに法人化

事務所概要

所在地 | 横浜市港北区篠原町1410
所有形態 | 定期借家5年
竣工 | 1975年（既存）
2022年（改修）
構造 | 鉄骨造平屋建て
延床面積 | 99.18㎡



本拠地の神奈川に加え、プロジェクトが進行中の高知、香川へ頻繁に通い、各地で地元の人々との交流を深めている



1



3



5



2



4



6

- 1 店舗スペース壁面。既存の金属製壁面を現し、横架材をそのまま展示台としている
- 2 開口部をはね上げ式とした厨房。フローズンカフェバーと、日替わりで店舗が替わる仕組みのシェアキッチンが共用する
- 3 一窓単位で借りることができる貸しスペース「マドグチ」。青い吊り棚「BINGO」と灰色の壁を背にする「DOOR」と2種類ある
- 4 「マドグチ」は1カ月あたり一般3,300円（税込）と気軽にチャレンジできる価格設定
- 5 「マドグチ」の商品の購入代金は赤いポスト型の集金箱に入れる
- 6 「ARUNO」の名前の由来は『シートン動物記』の1篇「伝書鳩アルノー」から。郵便局らしさを残すべくこの名に

対談

地元で積み重ねる、小さな都市計画の実践 若林拓哉 × 門脇耕三

新横浜に育ち、建築を志す

門脇 若林さんは、ここ新横浜が地元なんです。案内いただいてイメージが変わりました。まったく新しく開発されたまちだと思っていたのですが実際は、年数を経た住宅と新しい家が混ざり合っていて、里山も残っている。そのまち並み越しに高層タワーも見えるという重層性を面白く感じました。

若林 駅の北側は開発が進んでいますが、僕が暮らしている篠原町は違います。先祖は江戸時代以前からこの界隈に住んでいて、祖父の代までは農家を営んでいました。東海道新幹線の開通をきっかけに祖父が不動産業を始め、まずは木賃アパートを、続いてそこに暮らす人や新たに移り住んできた人が食料品や生活雑貨を購入できる場所として「新横浜食料品センター」をつくるという流れで、まちづくりのようなことを始めたんです。

門脇 まちの開発とともに、家業も転換されたわけですね。どんなご実家でしたか？

若林 盆と正月には親戚が集まって、葬式も家で挙げたりと、少し古風なところはあると思います。ただ僕自身は兄と姉のいる末っ子で、自由に育ててもらった感じです。

門脇 自然も豊かな環境でのびのびと育った若林さんが、なぜ建築を志したのでしょうか。

若林 理数系の科目と、小学生のころからパズルや立体迷路をつくったり手を動かしたりすることが好きだったので建築がいいかな、くらいの軽い気持ちで選びました。

門脇 家業を意識したわけでもなく、ご自身の興味で進まれたわけですね。芝浦工業大学に入学してからはいかがでしたか？

若林 八東はじめさんによる1年時の授業が印象的で、「アインシュタイン塔」あたりから現代建築まで、とにかく徹底的に建築を見せられつづけたんです。膨大なインプットによって建築を大枠で理解でき、なかでも特にフランク・O.ゲラーやダニエル・リベスキンドなどのフォルマリスト的な建築家に傾倒していました。最近の動きからすると意外だと思われていますが

実は形をつくるのが好きなんです。

門脇 その形に対する関心は、設計演習の評価にもつながりましたか。

若林 そうですね。形をつくりやすい規模感の課題が出はじめた2年時からは、講評会で毎回選ばれるようになりました。なのに卒業設計でつまずいて、賞を決めるときの票もごくわずかしかりませんでした。

卒業設計で味わった挫折

門脇 それまで順調にきていたのが、挫折を味わった。どんな内容だったのでしょうか。

若林 テーマは国会議事堂の再建です。参議院をなくし、都道府県の代表が集まる議場をつくらせて衆議院と対立させ、中心にパブリックな場をつくる提案でした。きっかけは家族との会話です。そのころ、父や兄と政治について話すことが多かったのですが、彼らは政治に文句は言うけど具体的なアクションは起こさずとしない。そこに違和感があって、政治の中核をオープンにして、市民が政治にコミットしやすい仕組みにしようと考えたわけです。

門脇 何う限りでは元来のフォルムづくりの上

手に政治的な問題意識を合流させた意欲作だと思われていますが、なぜ評価につながらなかったのでしょうか。

若林 非常勤講師の方から「君の話は難しくてわからない」と言われたのを覚えています。卒業設計を通して、初めて伝えることの大事さを認識しました。

門脇 強烈な思い出ですね。大学院に進まれてからは、どんなことを？

若林 西沢大良さんの研究室の一期生だったのですが、西沢さんは大学に設計実務をもち込まないスタンスだったので、ひたすら港湾都市のリサーチをしていました。西沢さんが書かれた「現代都市のための9か条」(初出『新建築』2011年10月号)をベースとする研究で、港湾都市は現代都市にとって大事な要素「エネルギー・食料・人・情報・技術」が集約される場所として、対象に設定されていました。

門脇 図らずも都市の研究に没頭されたようですが、その経験は、実務に結びつくトレーニングになったのではないのでしょうか。

若林 そうですね。敷地を見たときに、そこがどういう場所で、日本、ひいては世界的にどんな位置づけにあるのかと考える癖がつかいました。



リモートワークで修業を積む

門脇 大学院を出たあとの若林さんの経歴は独特ですね。ご自身の事務所「ウミネコアーキ」を設立する傍らで設計事務所「つばめ舎建築設計」のパートナーになっています。

若林 建築家として活動するためにまずは実務経験を積みたい。でも所員として修業して師事した人の系譜に入るには抵抗がありました。これは西沢さんの影響かもしれないのですが、スタンドアロンで建築界と相対するポジションにいたほうが、物が言いやすい気がしたんです。そこでまず自分の事務所を設立しました。そして適度な距離を保ちつつ実務を手伝うことができないかと、つばめ舎の永井雅子さん、根岸龍介さんに相談したところ快諾してくれて、パートナーという関係でやらせてもらえることになりました。

門脇 職人肌の事務所ですよ。若林さんとは年齢も離れているのではないのでしょうか。

若林 根岸さんがひとまわり、永井さんがふたまわり上で、ふたりとも川口通正さんに師事し、木造建築を得意としています。一方で理論の構築やコンセプトメイキングは得意ではない。CGやAdobeなどのソフトウェアもあまり使いま



ウミネコアーキの拠点であり、「ARUNO -Yokohama Shino hara-」や「新横浜食料品センター」が立地する篠原町のまち並み。JR新横浜駅の南側にあり、開発が目覚ましい駅北エリアとは様相が異なる。起伏に富んだ地形で狭い道も多いなか、昭和生まれの住宅群と、近年開発された宅地が混在し、里山もところどころに残る。若林はこの界隈に江戸時代以前から続く家の出身



せん。そこで僕が彼らがもっていないところを補う形でかかわっていました。

門脇 新しい風を入れる役割ですね。どんな働き方をしていたのでしょうか。

若林 外注で、プロジェクトごとに業務委託契約を結んでいました。だから給料をもらって働いていたわけではないんです。

門脇 毎日、何時から何時まで事務所にいるという感じではない。

若林 そうですね。当時、神田にあった事務所での週1回の定例会議に出る以外は、自由にしているという契約です。最初からリモートワークで、労働時間は自分で管理していました。

建築家的スタンスと場づくりの実践の両立

門脇 ウミネコアーキとしての活動はどんなふうに並行させていましたか？

若林 大学院を修了したその年から、神田を舞台とする「TRANS ARTS TOKYO 2016」にペットボトルで構築した山車のインスタレーションを出展したり、人間の性格特性をある手法を用いて定量的に分析し、ライノセラスとグラスホッパーによってパラメトリックに空間を生成するプロジェクトを発表したりしていました。**門脇** リモートワークで修業しながらも、古典的な建築家らしく自らのビジョンを示す活動もしていたわけですね。

若林 そうですね。建築家にはなりたいたと考えていたので、そのための実績をつくりスキルを養うことは意識していました。たとえば作品が賞レースで評価される、論考として耐えられる質の文章を書き、本を出すといったことはしていきたいと思っています。

門脇 『建築ジャーナル』で、連載ももっていましたね。

若林 「現代建築家宣言」というタイトルで、3カ月ごと8,000–1万字くらいの文章を発表す

ることを2年半くらい続けていました。

門脇 一方つばめ舎で修業をされてみて、どんな成果が現れましたか。

若林 2階建てのアパートを職住一体型の賃貸集合住宅へとリノベーションする「櫻の音terrace」(2018)を担当したのですが、そこでは道路側にデッキを張って共用スペースとするというプロジェクトの根幹となる提案をしつつ、ほとんどの図面を描きました。

門脇 計画案の作成からいわゆる所員的な実務まで、設計の仕事を一通りこなされたと。ここでのプログラムの組立てやプレゼンテーション、コミュニティの盛り上げ方には、ハードとソフトの設計を並行させる現代的な手法が取られていますね。

若林 それには初期段階でスタジオ伝伝の藤沢百合さんがかかわられたことが大きいです。彼女はいま岐阜の郡上八幡で事務所を構えているのですが、ちょうどそちらに移ったタイミングで動きはじめたプロジェクトだったので、東京でプロジェクトを見られる人が欲しいとつばめ舎に声がかかったんです。

門脇 そこでコミュニティベースの建築づくりを実践を通して学ばれたわけですね。もともとそうした志向はあったのでしょうか。

若林 まったくなかったです。でもここでの経験のおかげで、さまざまな可能性に気づかされました。ひとつは設計の前段階における企画の大事さです。多くの設計者は入居者像の想定はしますが、選定まではしません。募集はスタジオ伝伝が主導したのですが、僕らも面談に立ち会ったりと、リーシングにかかわりました。運営も最初の半年間は、僕らが毎週通ってサポートしました。そこで施設と入居者のマッチングや、ある程度の段階までの場づくりに伴走しないと描いたビジョンは実現できず、設計図は机上の空論でしかないことを実感しました。



まちの別邸 耕 shu (2022)

高知市内の菜園場商店街内にあるゲストハウス「TOMARIGI HOSTEL」を宿泊施設と地域の日常をつなぐ「まちやど」として価値転換を図るプロジェクトの一環として、別館の改修を担当。2020年にやぐらのような二段ベッドをもつ個室3室へと改修。2022年、二段ベッドを残しながらキッチンのある大きな個室“居間”と、“小部屋”からなる2室に再リノベーション。1人でも複数人でも宿泊できる、多様でゆとりある使い方が可能な宿泊スペースを設計した【写真：ウミネコアーキ】

地元で場と組織を育む

門脇 近年はウミネコアーキの仕事の比重が高まり、特に地元・篠原町でのプロジェクトが複数動いているようですが、どんなふうに始まったのでしょうか。

若林 まず祖父が建てた「新横浜食料品センター」の更新計画がもちあがりました。ところが事業計画を検討するなかで、宿泊をやってみようという軽い気持ちで始めましたが、事は深刻でした。まず第一種低層住居専用地域にあるため兼用住宅としなくてはならず、建物の約半分をシェアハウスとして運営しながら、残り50㎡の収益性を上げるためシェアキッチンとし、場所を時間で細分化して貸すという事業計画を立てました。個人事業主のまま融資を受けるのは難しく、2022年1月に法人化しました。でも1つの金融機関からのまとまった融資は受けられず、地元の信用金庫から1,000万円、日本政策金融公庫から500万円の融資を受け、さらに自己資金500万円を投じて工事費1,500万円、運転資金500万円をまかないました。

門脇 融資のために法人化したんですか？

若林 はい。加えて業務範囲が広がってしまい、組織化せずに動く限界に至ったというのもありました。

門脇 あえて単独行動を取っていたこれまでから、大きな方針転換ですね。どんな組織になったのでしょうか？

若林 意匠設計担当が僕以外に2人、プロジェクト単位でもう1人、加えてウミネコアーキの相方として人事や総務をやっている者がいます。**門脇** 相方がバックオフィス担当なんですね。**若林** 珍しい構成だと思いますが経営面を任せられ、僕は建築に全振りできるので助かっています。他に不動産コンサルタント、SNS広

若林拓哉氏のある日のスケジュール	
9:00	起床・朝支度
9:30	事務作業
10:00	事務所始業。設計チームミーティング
12:00	昼食
13:00	ワークタイム。合間に打ち合わせ
20:00	事務所終業。帰宅して夕食&お風呂タイム
23:00	ワークタイム
1:00	読書タイム
2:00	就寝

ARUNOにいるときと家にいるときで、異なるモードの仕事内容に取り組むようにしている。寝る前の読書時間は欠かせない



新横浜食料品センター (2024年竣工予定)

若林の祖父が築いた地域の生活拠点「新横浜食料品センター」の動的保存プロジェクト。50年以上の歴史をもつ建物の記憶を継承し、希望する既存店舗が休業せずに継続できるよう、食品店や飲食店の入居する1階と、賃貸住戸の2階からなる既存施設の半分を残し、半分を建て替え更新する。部分的に3階建てとし、1階に飲食店、2階に家具や加工食材などの販売店、3階に店主の一部が入居する住戸を収めた複合施設とする。ウミネコアーキの事務所も入居予定

所的にも周辺住民との関係性としても地域の中核にあり、ポテンシャルが高いんです。

門脇 吉田鉄郎以来の通信建築の系譜にある、柱梁のフレームからなる構成美が感じられる建物ですね。ウミネコアーキの自社事業として進めたのはなぜですか？

若林 誰かに任せるといなら自分たちでやろうという軽い気持ちで始めましたが、事は深刻でした。まず第一種低層住居専用地域にあるため兼用住宅としなくてはならず、建物の約半分をシェアハウスとして運営しながら、残り50㎡の収益性を上げるためシェアキッチンとし、場所を時間で細分化して貸すという事業計画を立てました。個人事業主のまま融資を受けるのは難しく、2022年1月に法人化しました。でも1つの金融機関からのまとまった融資は受けられず、地元の信用金庫から1,000万円、日本政策金融公庫から500万円の融資を受け、さらに自己資金500万円を投じて工事費1,500万円、運転資金500万円をまかないました。

門脇 融資のために法人化したんですか？

若林 はい。加えて業務範囲が広がってしまい、組織化せずに動く限界に至ったというのもありました。

門脇 あえて単独行動を取っていたこれまでから、大きな方針転換ですね。どんな組織になったのでしょうか？

若林 意匠設計担当が僕以外に2人、プロジェクト単位でもう1人、加えてウミネコアーキの相方として人事や総務をやっている者がいます。**門脇** 相方がバックオフィス担当なんですね。**若林** 珍しい構成だと思いますが経営面を任せられ、僕は建築に全振りできるので助かっています。他に不動産コンサルタント、SNS広

報、リサーチャー、グラフィックデザイナーなど計8–10人にかかわってもらっています。基本的には皆、業務委託です。

門脇 人数だけを聞くと急に大会社になった感じがします。でも実態としては、場所のあり方をデザインしていくなかで、組織も一緒にデザインされたというのが近いのかもしれないですね。ポテンシャルを活かしていて無理がない。**若林** 郵便局時代の価値を残しつつ転換するためにどうすればいいかと考えて、こうなった感じです。だから特にコミュニティスペース的な場所をやりたいわけではないんです。

門脇 自分の思想を元に場所をゼロからつくるといよりも、地域のツボを押して組織とともに育てていくような感じでしょうか。と同時に西沢大良さんが向き合っていたような、現代都市のあり方を、若林さんも模索されている気配も感じます。

若林 前線で場づくりに取り組むほうが結果的に、都市そのものを扱える感触はありますね。軸足は篠原町に置きつつ積極的に外の仕事もするし、海外含め他都市の状況も把握したうえで地域のことを考えたい。場所を維持していくには外の流れが必要。さもないと腐敗してしまう。そうではなく発酵させるには、ちょこちょこ手で混ぜないといけないと思うので。

門脇耕三 かどわき-こうぞう

建築家・明治大学准教授・アソシエツパートナー／1977年神奈川県生まれ。2000年東京都立大学工学部建築学科卒業。2001年同大学院修士課程修了。首都大学東京助教などを経て現職。博士(工学)。近著に、『ふるまいの連鎖：エレメントの軌跡』(TOTO出版、2020)など。

平塚 桂 ひらつか-かつら

編集者、ライター／1998年京都大学工学部建築学科卒業。2001年同大学大学院工学研究科環境地球工学専攻修了。2000年ばむ企画を共同設立。

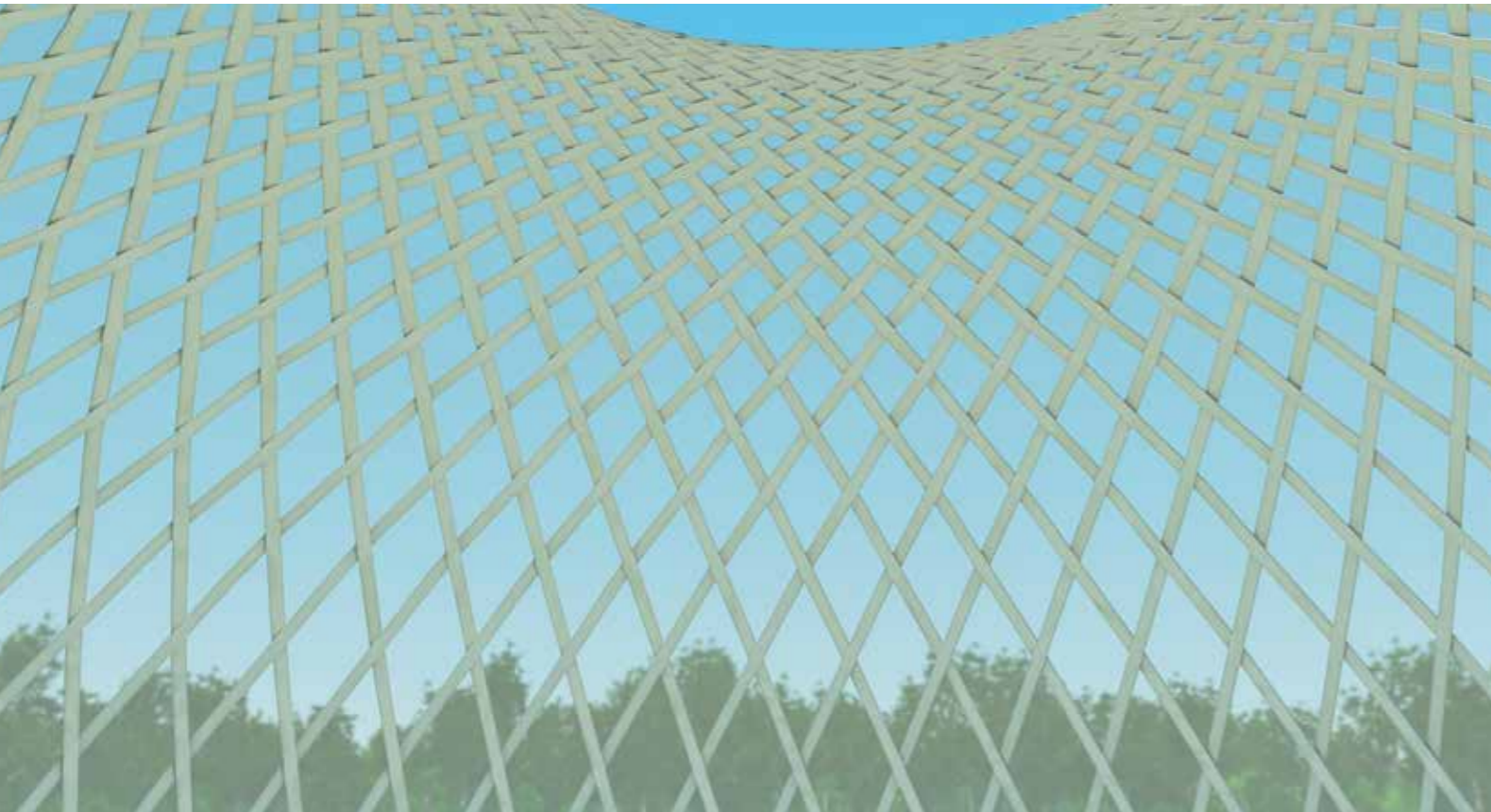
構造材になる、ならないと偏見をもたずに、あらゆる材料に等しく向き合いたいと思っています。

取材・文 | 高木伸哉

そういう姿勢で臨むことで、身近な素材や技術を活かした構造の可能性が広がります。

その先に構造エンジニアリングがかかわらなくても、安全なものがつくれる状況が生み出せたら。

——荒木美香



竹細工で用いられる「輪弧編み」を応用した竹のドームの内観イメージパース [提供: 荒木美香]

構造家の新発想 | 17 荒木美香

身近な素材と技術を使う

荒木美香氏は、当連載初回に登場いただいた構造家・佐藤淳氏の事務所出身。

さまざまな材料を等価に見て、固定観念にとらわれない思考法は、そこでさらに深められていった。

建築材料に限らず、日常生活にあるありふれた材料に次々と注目してゆき、構造体としての可能性を考えてみる。

彼女がそんなスタンスをとるのは、構造エンジニアがかかわらないところで、たとえば辺境の地で、住民が自分たちの手でも安全な構造がつくれるような方法を生み出したいという思いに端を発している。

荒木美香 あらき・みか
1984年神奈川県生まれ。2008年東京大学大学院建築学専攻修士課程修了。2008-2019年佐藤淳構造設計事務所勤務。2020年荒木美香構造設計事務所設立、2023年より合同会社Graph Studioに移行し、三原悠子・福島佳浩とともに共同運営を行う。2021年4月より、関西学院大学建築学部建築学科准教授に就任。

高木伸哉 たかぎ・しんや
編集者 / 1965年北海道生まれ。1991年芝浦工業大学大学院建設工学科修了。1991-2000年鹿島出版会『SD (スペース・デザイン)』編集部勤務。同誌副編集長を経て、2001年ブリックスタジオ設立。2002年より同社を共同主宰。2020年4月より同社主宰。

竹を編む

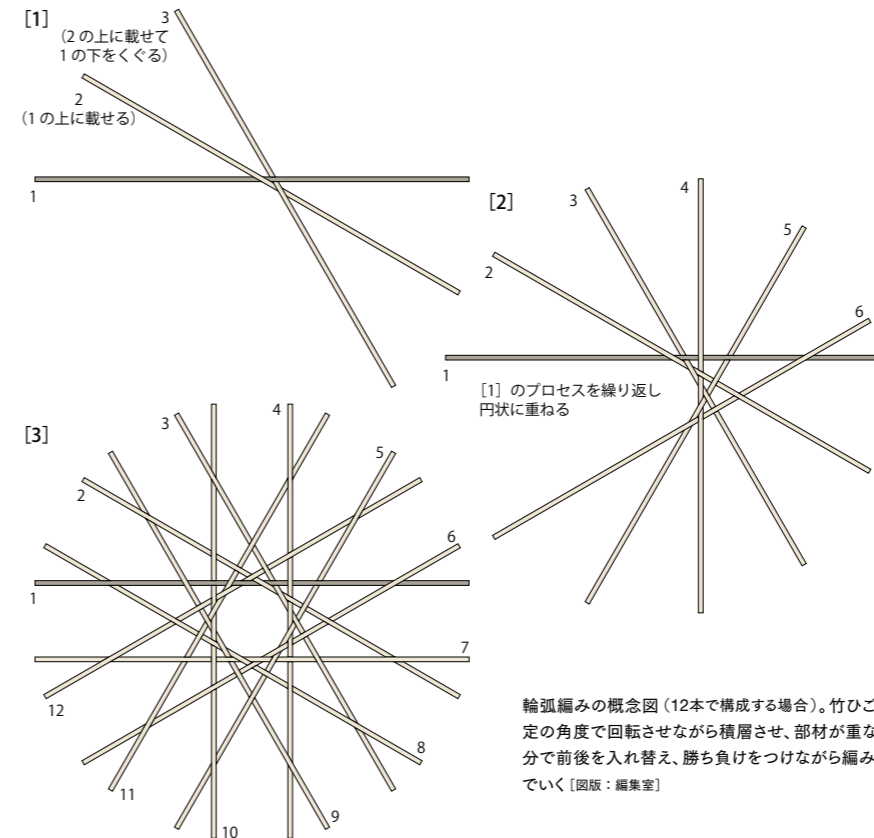
竹を構造材とした架構

竹は身近な材料だが、構造材として使われるのはまだ。理由は筒状の形にある。仕口加工ができないので接合が難しく、サイズを整える木割りもできないからだ。アジアに竹構造が見られるが、そこでの接合は縄による結束に頼っている。それは伝統工法であり、構造エンジニアリングはすなわち経験則だ。現代的な構造計算には載せにくい。荒木氏がこの竹に挑もうとしている。九州大学の岩元真明研究室とともに、仮設ではなく常設として機能するような架構を考えている。

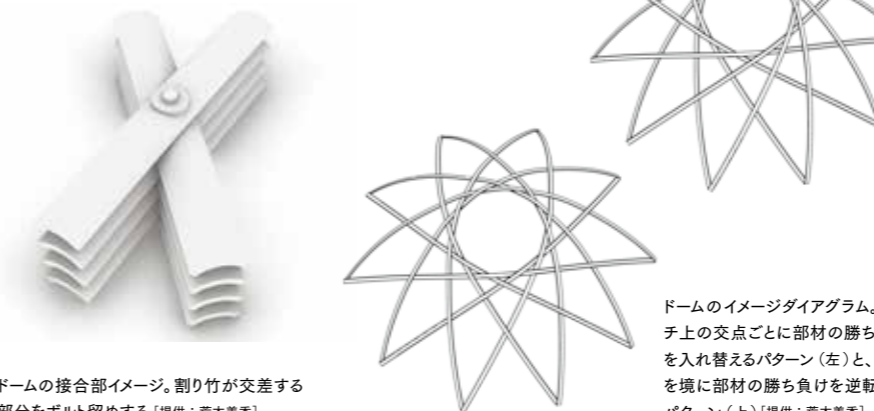
昨年建てた竹の仮設のテントでは、工学的に扱いやすくするため、接合部は縄ではなくボルト接合としました。最近私が考えているのは、竹を「編む」架構です。これは学生時代に組み組んだことがありました。伝統的な編み方のパターンを調べて、見つけたのが「輪弧編み」です。それをドーム状に立体化するのが。

輪弧編みは代表的な籠の編み方で、直線の竹ひごをずらしながら重ね、中心に輪をつくり組んでゆくもの。放射状の平面輪弧は、編み目を詰めてゆくと少しずつ竹ひごが持ち上がり、籠の形が現れてくる。これを逆に伏せて、スケールを拡大するとドームになる。割り竹のアーチが角度をずらして連続する構造だ。ドームの半径に応じて、割り竹を複数重ねて強度を上げ、編み目を固定するピン留めを施す。ここに汎用性の高い構造技術が生まれようとしている。

アーチを連続的に交差させることでシェル効果を生み、鉛直荷重に対して軸力系で支持する形式です。放射状に材を架け渡していくので、中心性のある構造に適しています。アーチの長さを調整することで中心をずらした非対称な形態も可能。応力の大きい脚部で密度が粗になるので、脚部ほど重ね本数を増やすなどの工夫が必要です。またアーチの頂部付近では部材が混み合うので、隣の接合部と干渉しないディテールの配慮が必要です。

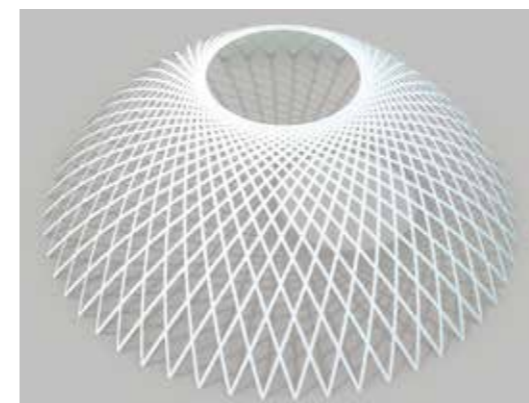


輪弧編みの概念図 (12本で構成する場合)。竹ひごを一定の角度で回転させながら積層させ、部材が重なる部分で前後を入れ替え、勝ち負けをつけながら編み込んでいく [図版: 編集部]



ドームの接合部イメージ。割り竹が交差する部分をボルト留める [提供: 荒木美香]

ドームのイメージダイアグラム。アーチ上の交点ごとに部材の勝ち負けを入れ替えるパターン (左) と、頂部を境に部材の勝ち負けを逆転するパターン (上) [提供: 荒木美香]



竹を用いたドームのイメージパース。中心をずらした非対称な形態に応用できる可能性がある [提供: 荒木美香]



2022年に九州大学岩元真明研究室と共同制作した竹の仮設架構「那珂川プロジェクト」の接合部。竹をプレートにボルト留める方法を採用した [写真: 岩元真明研究室]

荷造りベルトを掛ける

TRIAxis須磨海岸@兵庫県神戸市

こちらは貨物などを固定するポリエステルベルト。運搬時に荷崩れを防ぐために梱包物を縛っておく素材だ。荒木氏はこれを桁と垂木の間に掛けて、屋根のスラストを押さえるテンション材として利用した。仮設の海の家を、低予算で簡単に施工できる架構だ。

引張り材は木材や金属ワイヤーじゃなくてもいいわけです。平屋の軽い構造であれば、必要な引張り強度を発揮する材料はさまざまあります。実はこのプロジェクトの前に、引張り材に麻製のロープを使ったことがありました。固定はいわゆるロープ結びの一種を採用して緊結。やわらかく簡素なデザインが実現できましたが、撚ってつくられているロープは張力をかけながら施工するのに工夫が必要でした。そこで採用したのがポリエステルベルトです。重量のある荷物の梱包資材なので伸びの出にくい仕様になっています。さらに、ラチェット式の荷締め機で締め上げるので、施工しやすいのも利点。

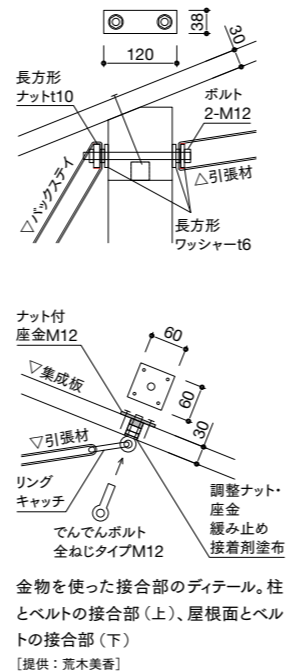
鉛直荷重だけでなく、風圧による逆向きの吹き上げ対策のために、軒下にバックステイを設けています。テント同様、屋根が飛ばされないよう、外側に打ったアンカーと桁の間にもこのベルト掛けをしています。

たとえば水道の金属パイプを棚枠に、工業用金属フィルターをパーティション・メッシュスクリーンなどに、他用途に製造されている既存の汎用材を、建築インテリア材料として転用する方法を目にすることはあったが、構造に使える材料転用はまだ多くはない。ここでは仮設だが、常設として利用する道も開かれている。

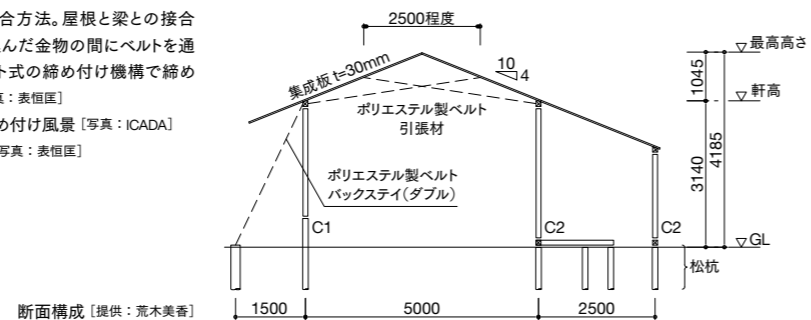


1

主要用途 | 海の家
意匠設計 | 岩元真明+
千種成顕/ICADA
構造設計 | 荒木美香/
佐藤淳構造設計事務所
延床面積 | 203.6㎡
主体構造 | 木造
竣工 | 2018年7月



- 1 ベルトの接合方法。屋根と梁との接合部に打ち込んだ金物の間にベルトを通し、ラチェット式の締め付け機構で締め上げた【写真：表恒匡】
- 2 ベルトの締め付け風景【写真：ICADA】
- 3 外観全景【写真：表恒匡】



断面構成【提供：荒木美香】



2



3

》》》》INSPIRATION | 構造家のリスペクト

発想の原点がここにある。構造家がリスペクトする歴史的建造物のひとつ

アジアで身近な素材「竹」を使いこなす技術

[Diamond Island Community Hall]

@ベトナム 設計：ヴォ・チョン・ギア・アーキテクト 竣工：2015年



1



2



3

身近な素材の竹に関心をもった荒木氏は、竹を構造体にした現代建築にも注目している。特にベトナムを拠点に活動している建築家ヴォ・チョン・ギアの作品には興味があるという。

ギアさんの竹建築は、現場で見せていただいた竹素材そのものにも興味をもちました。竹には多くの種類があるということ。この巨大な建物に使われている竹は、とても肉厚で空洞部が小さいものでした。もはやヤング率の高い木材とでもいえるほど、日本でイメージする竹とはかけ離れた材料。世界中でどんな竹がありどのように使われているかに関心を抱ききっかけとなった建築でした。

そんな強い竹を使いながら、比較的小径の竹を複数束ねて構造化しています。接合は、ロープによる結束ですが、その結束の仕方も強度が高く、そして美しい。

そんな植物材料を使っているながら、空間の第一印象は、フライ・オットの「マンハイムの多目的ホール」に近い感動を覚えたという。

必要最低限のように感じられる細かい線材を重ねて面的に覆う大きな空間が、そんな印象につながったのでしよう。しかしそれはスチールやワイヤーを使わずに、竹でも可能になる。そのための安定した形態や組み方を、建築家の経験と感覚で獲得している。そのあたりをとってもリスペクトしています。

- 1 ホールの内観。竹を組み合わせてつくった柱梁のユニットを複数組み合わせで結合している
- 2 接合部ディテール。縄で締め付けて4本の竹を一体化
- 3 外観全景。屋根は茅葺きで、上棟時に燻蒸し虫を追い払う

【写真1-3：荒木美香】

触覚デザイン | 14 大谷幸夫の手すり

ナビゲーター | 笠原一人 (京都工芸繊維大学助教)

取材・文 | 平塚 桂
写真 | 森田大貴

汎用材の組み物で 手すりを構成する

建築には人が直接手で触れる部位がある。それは人と建築の関係が濃密に築かれる触覚デザイン。独立した個が集合して、建築・都市が形成されるという設計理論は、階段手すりにも現れる。部材と部材、それぞれの形状を保ちながら、うまく組み合わさることで人の手になじむ手すりが生まれている。

大谷幸夫 おおたに・さちお
建築家 (1924-2013) / 東京都生まれ。1946年東京大学第一工学部建築学科卒業。同大学院特別研究生 (旧・丹下健三研究室)。1951年に満期退学後も1960年まで引き続き丹下の下で研修。広島平和記念公園および記念資料館、旧東京都庁舎などの計画・設計・監理に参加。1961年に設計連合を設立。1967年大谷研究室発足。主な受賞に日本建築学会賞、汎太平洋建築賞、BCS賞、BELCA賞などがある。

「大谷幸夫による手すりは、独立した部分が寄り集まるように構成されています。そこには自身の建築設計論が表れています」と笠原氏は言う。大谷は「覚書・Urbanics試論」*で「都市の膨張という現象をあげれば、それは都市自らの意思によるのではなく、個々の単位の意思と行動の結果である」と述べるなど、部分が集合し、有機的な関係をなすことで都市や建築になるという設計理論をもっていた。手すりもたとえば国立京都国際会館のものは、笠木、手すり、手すり子、腰壁と自立した部分の集合からなる。汎用材を加工し過ぎずに丸棒状、板状、フォーク型など、単純な形のパーツを組み合わせることで、手すりの総体をなしている。

国立京都国際会館には建築と相似する手すりもある。これも単に建築と形をそらえているわけではなく、部分の集合で全体をつくるとい

う大谷の設計理論に基づき、建物全体と手すりのデザインが相似していると考えられる。

「台形フレームの連続という建物の基本構成と共通する台形断面の手すりもありますし、ほとんどの手すりをバツンと切って断面を見せているのも、断面を露出させたファサード表現に通じます」(笠原氏)。

モダニズムを軸とする力強い骨格を用い、複雑な空間をまとめ上げていた大谷だが、時代が下ると手すりにも装飾的な表現を加えるようになる。たとえば金沢工業大学6号館の手すりでは、手すり子の端部を枝分かれさせて丸めるなどの装飾化が図られている。

「別の素材を追加したり、大きな加工を施したりするのではなく、端部を曲げる操作だけで、それをつかみにくく人との親和性を高めている。いわば語尾を和らげるような効果を狙ってい

るように感じます。さらに2つのバーを重ねたり、手すり子を幾重にも枝分かれさせたりもしています。後期の作品になるほど部分と全体の相似関係は強まって、あるパターンが入れ子状に自己増殖していくかのようなフラクタル的な関係に近づきます。建物の輪郭も和らいでいくのですが、手すりはその輪郭をぼかす役割も担っているように見えます」(笠原氏)。

大谷は「覚書・Urbanics試論」に、東京大学・丹下健三研究室の「東京計画1960」へのアンチテーゼを込めたという。手すりの造形とその変遷からは、モダニズムを丹下健三に学び、そして超えようとした大谷の、都市や建築に対する理念と試行錯誤が垣間見える。

*初出『建築』1961年9月号、青銅社



2



3

日本初の国際会議場として開館。メインラウンジのスロープは腰壁の高さや位置によって手すりの形状が3種に分かれている。個々に独立したパーツが群となって全体をつくっているのがわかる。この連載で登場する手すりは連続性を意識したものが多く、ここではパーツ同士は途切れて独立を保っている。桁の上端に丸棒のついた手すりは、バリアフリーのため後付けされたもの。「一般的に後付けパーツは異物になりがちですが、ここでは調和をなしています」と笠原氏。部分は隣接するものとの関係性によって自己組織化されるという大谷の設計理論を体現した手すりと言えそうだ。



4

- 1 メインラウンジ・スロープの手すり。腰壁の上に乗っている笠木と、建物断面に似た逆ハの字の手かけは、オリジナルのもの。スロープが増設された際に、オリジナルのデザインを踏襲し、板材の上に丸棒を相欠きで組んだ組み物の手すりが設置された。丸棒はセットバックして組むことで、簡単かつ安定した手すりになっている。このディテールは金沢工業大学など、他の事例でも用いられた
- 2 3階会議室前の階段手すり。会館スタッフや運営者が使用する手すりの仕様になっている

- 3 ロビー階段のコの字に組んだ手すり。小口は突き板仕上げ。テラスなど外部のプレキャストコンクリート製手すりと同じデザインを木製で踏襲したもの。手前の出っばりは手でつかみやすく、奥の出っばりは体を預けやすい。2つの機能を備えている
- 4 メインラウンジ階段手すり。写真1と同様の構成で、来館者が使用する手すりの仕様。手すりは一部で接続せずに縁を切っている。逃げをつくらぬ接続は避けてクリアランスを取ることで、個々の独立部材間のコンフリクトを解消している。隣の手すりと接合している端部は、手指があたらない納まり

1966年 / 京都市左京区
国立京都国際会館 スロープ・階段



2



1

会議棟、展示棟、劇場棟からなる大規模集会施設。その建物は、花びらを重ねたような屋根をはじめ、曲線的な造形で満たされている。手すりはいずれも丸棒やフラットバーといった汎用材からなり、「語尾を和らげる」ように端部が丸められている。「手すりが二重になっているのは、屋根の重なりと相似関係、それもフラクタル的な自己相似の関係になっている気がします」と笠原氏は、部分と総体の関係を探求しつづけた大谷の、ある時期の考え方が表れていると捉える。「外部階段の手すりは目立つ場所にあり、建物の輪郭を和らげています。またホワイエの階段には2本の手すりを高さ違いで重ねており小さな子どもでもつかみやすく、いろいろな意味であたりがやわらかい手すりです」（笠原氏）。

- 1 会議棟レストランへの外階段手すり
- 2 劇場棟のホワイエ階段手すり。スチールの丸棒を2本組んで、幅広い階段の仕切りと中間の手すりとしている。手すりはフラットバー。バーの曲げ幅で手すり位置を調整し、棒は丸めて端部を納めている
- 3 劇場棟の外階段手すり
- 4 劇場棟ホワイエの階段手すり

笠原一人 かさはら・かずと
 京都工芸繊維大学助教 / 1970年生まれ。1998年京都工芸繊維大学大学院博士課程修了。2010-2011年オランダデルフト工科大学客員研究員。著書に、『ダッチ・リノベーション』（鹿島出版会、2021）など。

平塚 桂 ひらつか・かつら
 編集者、ライター / 略歴は43ページ参照



3



4

1982年 / 石川県野々市市
階段 金沢工業大学6号館

大谷がキャンパス計画を担当した金沢工業大学のなかでもランドマーク的な施設で、ライブラリーセンターの機能をもつ。日本建築の高欄のように手すりの端部を反らせたり、手すり子を構成するフラットバーを枝分かれさせて端部を丸めたり、汎用的な材料に曲線を加え、触りをよくしている。「作風が装飾化しつつある時期の建物で、骨格ははっきりしていますがアーチ型のコロネードを用いるなど輪郭が少しぼやけている。その曲線モチーフが手すりにも連携し、端がくるっと丸まったり、端部がほぐれたデザインになっています」と笠原氏。



2



3



4

- 1 メイン階段の手すり。スチールのフラットバーを2本組み合わせた手すり子を同じくスチールバーの桁で連結し、その上に丸めた木の角材を組み込んだもの。それぞれ端部をカブさせることで、人の触れやすさを生んでいる
- 2 メイン階段
- 3 ラウンジ階段手すり。スチールフラットバーの手すり子と桁の上に丸棒の手すりを組み込んだもの。端部で組んでいるため、丸棒は桁の上に浮き上がり、軽快さを増している
- 4 中庭側の階段手すり。写真3と同様の構成



1

1996年 / 山口県岩国市
階段 山口県岩国総合庁舎

山口県庁の出先機関。コンサートホールを中心とした公共文化施設・シンフォニア岩国と一体で設計・整備されている。両施設は人が集まる場にふさわしく多様な手すりや彩られているが、笠原氏が注目するのは「建物の縁をレースのように飾り、輪郭をぼかしている」外部階段の手すり。近寄りたくなりがちな非常階段に装飾を施して親しみやすさを与えている。加えて手すりと手すり子を一体化したハニカム状の構成は、手すりの剛性や安全性を高める効果もありそうだ。「三角形の集合でできていて、支柱と笠木、部分と全体というヒエラルキーすらなく自己相似の関係にあるのも興味深い」と笠原氏。



1



2

- 1 外階段室。ささらと柱が三角形の構成となって現れている
- 2 外階段室。フラットバーが溶接されて図像化したものが、手すりと手すり子を構成している。モチーフの三角形は、階段室全体の三角形構成とフラクタルな関係にある

土木のランドスケープ | 17

松原市民松原図書館 (読書の森)

大阪府松原市

ナビゲーター・文 | 八馬 智 (千葉工業大学教授)

写真 | 新良太

土木施設はその機能を果たすために、時として人を遠ざけてきたが、徐々にその巨大な体を開き、人に寄り添いはじめた。公共空間として、ランドスケープとして、人の手に復権された新しい土木の景色をみつけてみよう。

大阪府は年間の降雨量とともに水量の豊かな川が少なく、昔から農業用水をためるために多くのため池がつくられてきたという。今回採り上げるのは、大阪府南部に位置する「松原市民松原図書館」だ。この図書館の大きな特徴は、その立ち方にある。既存のため池の中から立ち上がり、躯体の周囲がぐるりと池に囲まれているのだ。分厚いコンクリート壁がそびえ立つ姿からは、人工物でありながらも周辺環境に調和した、永い時間に耐え得る自然物のような力強さを感じられる。既存のため池の機能が拡張され、「土木のランドスケープ」としてもアップデートされた事例である。



建物を招き入れる農業用ため池

地域の景観を構成するため池

松原市の文化施設が集まるエリアの一角に、図書館が水面に浮かぶ農業用のため池がある。市街地の道路を走っていると、住宅の隙間から突如として大きなコンクリートの塊が出現する。近づくにつれて、その周囲に前庭のごとく広がる水面が顔を覗かせ、ため池の底から建物が城郭のように立ち上がっていることがわかる。

この建物は「読書の森」と称される松原市民松原図書館である。外壁は傾斜のある面で構成され、その不定形な姿は不思議なことに威圧感を感じさせない。赤みを帯びたムラのある色彩や荒々しいテクスチャーも効いているのだろう。建物の三方には堀のような水面が連続し、その周囲の公園で佇むことができる。館内に足を踏み入ると、厚みのあるコンクリートの壁に囲ま

れた空間が広がり、水面と同じ高さに設定されたフロアに誘導される。大きな窓からは豊かな光が差し込み、ため池の存在が体感できる。

古くから農耕が営まれてきた松原市周辺は、比較的雨が少なく平坦な地形であることから数多くのため池が点在し、農地に用水を供給してきた。その数は昭和初期には130カ所以上あったが、主に1960-70年代に人口の増加と市街化の進展により多くが埋め立てられ、現在ではおよそ3分の1に減少しているという。それでも、地域の景観を構成する重要な要素であることには違いない。

ため池は農業用水を確保するだけでなく、多面的な役割を担うことがある。雨水を一時的に貯留し周辺の浸水被害を低減する機能や生態系の維持、親水空間の創出などの機能である。そしてここでは、人々が集う建築物

をため池の中に招き入れることで新たな役割が追加され、ため池の機能が拡張された。

実はこの地域には、この図書館と同じく水上につくられた歴史的な構築物がある。水面に囲まれた前方後円墳だ。この古墳群は時間的にも空間的にもスケールの大きい人工物でありながら、住宅地の背景に自然地形のようになじんでいる。その独特な景観は、新図書館の有りように大きな影響を与えているという。

古墳のような佇まい

この図書館は設計から建設までを2年程度で行うことを意図した、設計施工一体型のプロポーザルによって実現した。もともとはため池を埋め立てることが想定されていたが、設計チームはため池を埋め立てずに保全し、ため池の



1



2



3



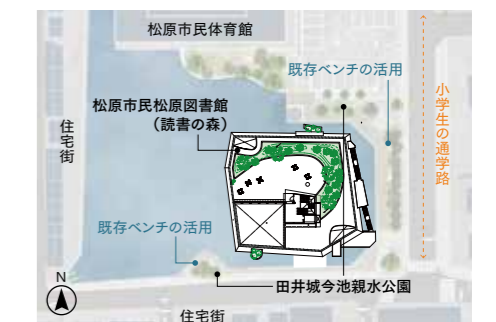
4



5

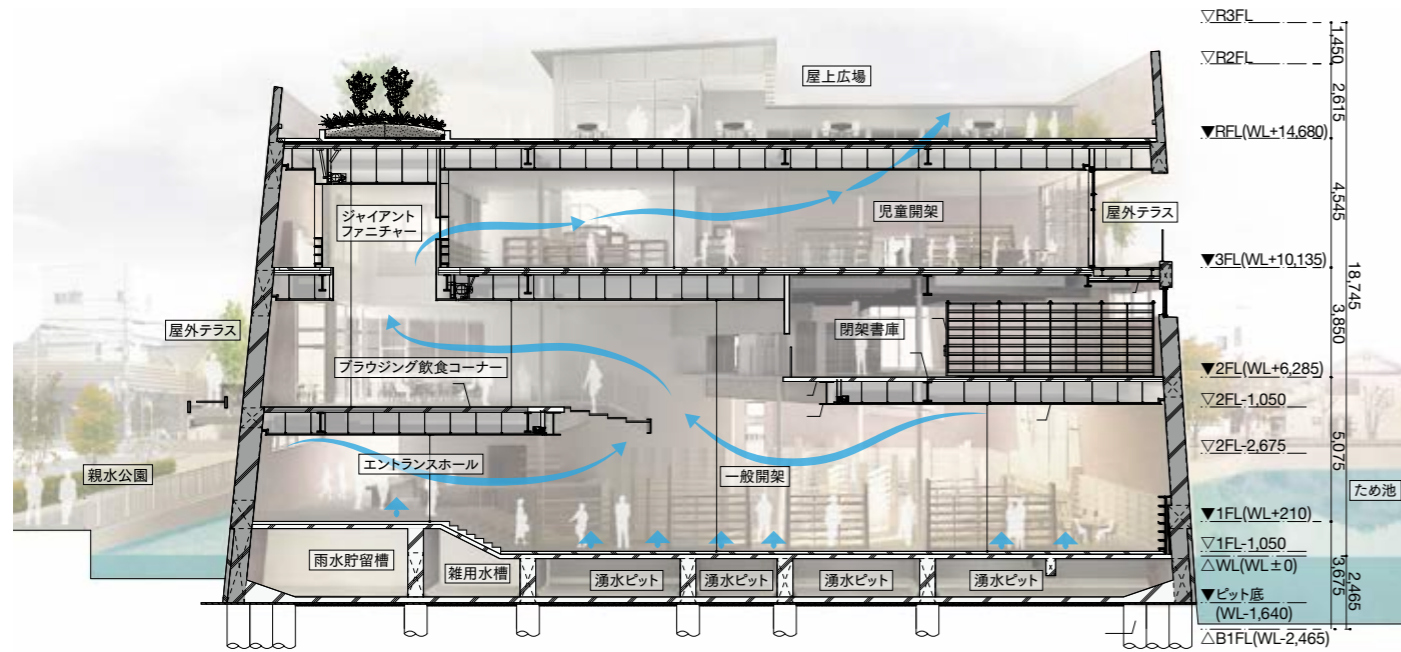


松原市周辺地図



松原市民松原図書館 配置図 [提供: MARU, architecture]

- 1 北側外観
- 2 2階ブラウジングコーナーをつなぐ中階段から、1階一般開架西側窓辺の間覧スペースを見る
- 3 最寄り駅から住宅街の道を抜けると現れる図書館は、コンクリート造の巨大なボリュームにもかかわらず、外壁が傾斜した不定形な外形や、周辺の文化施設に合わせたカラーコンクリートの効果により、周辺環境と調和している
- 4 1階一般開架の北側窓辺の学習スペース。窓越しに、隣接する田井城今池親水公園の東屋が見える
- 5 3階児童開架の西側テラスから北西の方向を見る。右手奥はボランティア室



松原市民松原図書館 東西方向断面図 [提供: MARU. architecture]

中に直接建築をつくる案を提示した。ため池は管理された水面であるがゆえに、建築物をつくるのが可能と考えたのである。埋め立てにかかるコストと工期が削減されること、既存の親水公園を残して市街地に水辺の魅力が継承されることが示されたのだ。

ため池の中につくる人工物として、永い時間を経て環境に調和している古墳の存在がダムなどの土木構造物に見られる力強さと重なり、それらのもつ意味を参照したという。たとえば、傾斜と不定型な輪郭によって人工物としての完結性を弱め、環境になじむ独特な佇まいを具現化した。一般的な鉄筋コンクリート造建築の壁厚の、約3倍にあたる600mmの外郭が採用されており、この外郭が地震や風によるすべての水平力を負担している。また、コンクリートの断熱性能にも期待することで、内外の仕上げを打ち放しとした。それに対してヒューマンスケールに合わせた内部空間は、軽やかな鉄骨フレームによって構成され、スパイラル状に循環するように立体的につながっている。つまり、外郭は永い時の試練に耐えられる堅固さを持ち、内部は将来の変化に対応して改変が可能な柔軟性の高い軽い構造とすることが取り入れられたのだ。

ため池を保全することによる環境面でのメリットも示された。ため池により冷やされた空気が周辺市街地を冷やすとされ、実測値としても確認された。また、建物の周囲に水を循環させることで、ため池の水質保全に寄与することも示された。

水辺の価値の再提起

近代建築はその価値の優劣にかかわらず次々と取り壊され、建て替えられているという現実がある。この図書館はため池とともに永くそこにあることを志向し、スケールの大きい時間軸を考えてつくられた。その外観を一見すると周辺の土地とは切り離され、日常生活からも切り離されていて容易には近づけないような存在に見えるが、ため池とともに捉えれば、地域の景観の文脈に則っていることがよくわかる。

ため池の景観は地域の産業や文化の履歴を物語る重要な要素だが、地域の人々にとっては日常的なあたりまえの景観であるため、あまり重要視されてこなかったかもしれない。事実、現在残されているため池の多くは直立の護岸やフェンスで囲まれて水面に容易に近づけないなど、素っ気なく扱われている。しかし、この図書館によってため池の風景が日常のなかにあらためて取り込まれ、それを楽しむことが誘発されるようになった。このため池は、建築を招き入れたことでまちの中の水辺の価値を再提起し、新たな魅力を付与したと言えるだろう。地域に埋もれている資産の役割を、文脈に則って適切にアップデートすることで、そのランドスケープは地域の新たな核になり得るのだ。

取材協力: 高野洋平・森田祥子 (MARU. architecture)、大宅孝・井上彩矢佳 (松原市役所 市民協働部 いきいき学習課)

- 1 1階一般開架西側窓辺の閲覧スペース
- 2 敷地南側の前面道路に設けられた田井城今池親水公園から見る、図書館の西側壁面。図書館1階のフロアレベルは、ため池の水面レベルにそろえられている
- 3 敷地北側から見る夜景外観

八馬 智 はちま・さとし
千葉工業大学教授/1969年千葉県生まれ。1995年千葉大学大学院修士課程修了。株式会社ドーコン(旧・北海道開発コンサルタント)勤務などを経て現職。博士(工学)。著書に『ヨーロッパのドボクを見に行こう』(自由国民社、2015)、『日常の絶景: 知ってる街の、知らない見方』(学芸出版社、2021)がある。

松原市民松原図書館 概要

所在地 | 大阪府松原市田井城3-1-46
設計期間 | 2018年1月-11月
工期 | 2018年2月-2019年11月
面積 | 1643.57㎡ (敷地)、1043.24㎡ (建築)、2987.33㎡ (延床)
階数 | 地上3階、地下1階、塔屋1階
構造 | 鉄筋コンクリート造+一部鉄骨造 (主体構造)、直接基礎+一部地盤改良 (杭・基礎)

事業者
松原市

設計者
MARU. architecture、鴻池組

構造設計・電気設備設計・機械設備設計・照明デザイン
Arup

サイン計画
MARUYAMA DESIGN

植栽計画
GAヤマザキ

図書館計画支援
アカデミック・リソース・ガイド

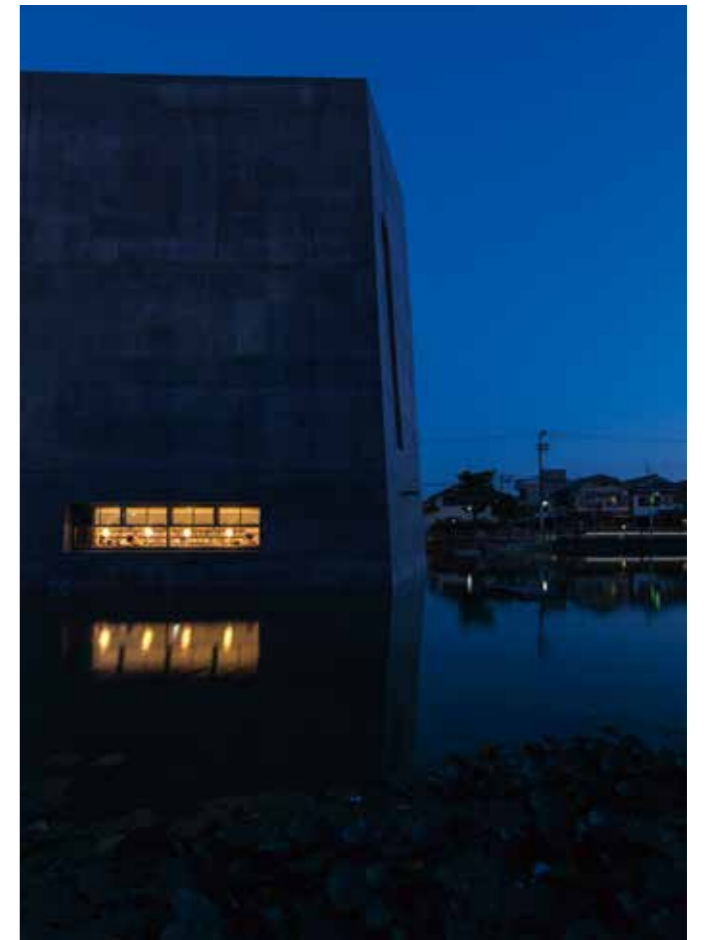
施工
鴻池組



1



2



3

Z世代向け コンセプト住宅づくりワークショップ —— 学生や工務店とパッシブデザインを考える

文 | 河原 諭
LIXIL
LIXIL Housing Technology
営業本部 TH統括部 TH戦略部
パッシブファースト推進グループ



【写真1】プロの設計士が見守るなか「即日設計」を行う。慣れない手書きでの設計に挑戦する建築学生

「体験できる付加価値」が求められる昨今、住宅づくりにおいても、気軽に設計に参加でき、楽しめるようなプロセスが求められつつあります。一方、「住宅が心地よい空間であってほしい」というニーズを満足させるために、パッシブデザインをさらに広げていくことも必要です。これからの購買層であるZ世代とLIXILが、ともにパッシブデザインを考えたワークショップの模様をご紹介します。

学生とプロの設計手法の違いを学ぶ

Z世代の考え方を踏襲した住宅商品の開発に向けて、まずは、中国・四国エリアの工務店と、関東圏を中心とした建築学生サークル「フラット」による「コンセプト住宅づくりワークショップ」をオンラインで開催しました【写真2、3】。「住宅性能の向上」をテーマにしたグループディスカッションでは、「授業で木造住宅の設計を行った際、家族を意識し、日当たりのよい住宅をつくらうとした」と話す学生

に対し、工務店の設計士が「住宅という空間に入ったときにどのように感じるかが大切。空間づくりにマニュアルはなく、人の五感に訴えかける設計をすることが大きなテーマである」と返す場面も。加えて、「料理は味を知らないとつれない。食べて身につけるものである。建築も見て、体験して、このようなものをつくりたいと考えていくことが、よい設計をするためには必要。具体的な方法としては、第一に気持ちよさの提供、第二に気持ちよさの数値化、第三に安心の担保、という3本の柱がある」と、学生にプロの設計手法を丁寧に教える姿が印象的でした。

よいデザインとは何か

学生からは、建築に対する価値観の一例として「デザインを考える際、雑誌やインスタグラムなどのSNSから情報を得ることが多い。そのため派手、特異的、写真映えるものに惹かれる」といった意見も寄せられました。

「パッシブデザイン」をテーマにしたディスカ

ッションでは、設計士がこうした傾向について「若いころは奇抜なモノをつくりたくなる。しかし、奇抜なモノはもって1年。50年後に行ったときにもやはり気持ちがいいと思われる建築、多くの人が心地よいと思える空間やモノが、よいデザインだと思う」と説明し、学生は大いに納得した様子でした。

ディスカッションを終えて、「学生と一緒にパッシブファーストを考えた家づくりについて、じっくり話し合うことができ、Z世代への提案のヒントを得る機会となった。オンラインでの参加だったが、リアルと同じくらいよい体験ができた」と設計士。最後に、ワークショップを主催したTH統括部統括部長の対馬儀昭が、「学生さんの自由な発想と設計士さんのプロならではの考えに学ぶことが多々あり、LIXILにとってもたいへん有意義な会となった」と総括しました。この日行われたディスカッションの内容は参加者全員と共有し、参加した工務店からは、Z世代の多様な考えを学ぶ機会になったという声をいただきました。



【写真2】ワークショップに参加した建築学生サークル「フラット」の皆さん（前列）とLIXIL TH統括部メンバー（後列）

パッシブデザインをテーマに即日設計

続いて、東北エリアの工務店と、仙台市周辺で建築・都市・デザイン・土木を学ぶ有志による学生団体である仙台建築都市学生会議のメンバーらにご参加いただき、「即日設計ワークショップ」を開催しました【写真1、4、5】。

学生、設計士、LIXILのチューターが4〜7名で1グループとなり、雑談を交えながら、「取り入れたいパッシブ機能」や「どんな住宅にしたいか」などについて、自由な発想でおのおの意見を出し合い、メンバーのなかでパッシブファーストの家が少しずつ形になっていきました。

施主条件は、30代前半の夫婦と子どもが2人の4人家族。その他、諸条件・要望をもとにプランを検討。学生の自由な発想と設計士のプロのアウトプット力、アイデアがその場で図面に反映されていきます。途中、行き詰まることもありましたが意見を交わり、何度も検討を繰り返して1日目は終了しました。

暮らしに多様性を与える家に

2日目、ギリギリまでかかって図面を仕上げ、いよいよ成果の発表に。各グループ、それぞれパッシブの要素を各所に織り混ぜながらも、吹き抜けや大きな窓を設けた開放的なLDKが特徴的なプランや、土間での多様な過ごし方を提案したプラン、住宅内外のつながりを意識した庭の池や芝まで考えたプランなど、特色の異なる住宅を完成させました。設計士が「日頃は自分ならどんな住宅にしたいか考えて設計しているが、今回は若い彼らが住みたい住宅にするためのアイデアをたくさん詰め込むことができた」と学生と一緒に考

えたプランに自信をみせる場面もありました。

学生からは「いつも教えてもらう立場だったが、今回はプロと同じ目線に立って対等に議論できたと感じた」、工務店からも「学生の意見を聞くという機会は普段なく、よい経験だった。今後の仕事にも活かしていきたい」、「若い世代とは考え方やその順序に違いがあった」、「学生の考え方を採り入れながら検討できて勉強になった」などの声が上がリ、互いにより刺激を享受し

合う時間となりました。

環境に配慮するパッシブデザインは、これからの住宅購入層となるZ世代が高い関心をもつ、ニーズのある住宅設計の手法です。LIXILビジネス情報サイトにて、セミナーやコラムなど、詳しい情報を発信しておりますので、ぜひご覧ください。



【写真3】「住宅性能の向上」をテーマにしたオンラインでのグループディスカッションで、設計士の話真剣に耳を傾ける建築学生



【写真4】仙台で行われた即日設計ワークショップの様子。LIXILのチューターがパッシブデザインを採り入れたプランを紹介し、即日設計するプランのベースをつくる



【写真5】学生、設計士、LIXILのチューターが1グループとなって意見を出し合い、理想の住宅を検討する

LIXILビジネス情報サイトでは、商品情報、カタログ、2次元・3次元CADデータ、BIMデータ、画像データのほか、施工事例やコラム、アフターサポートに関する情報もご覧いただけます。また会員に登録していただくことで、カタログ請求、セミナー申し込み、メールマガジンの購読、会員限定コンテンツの閲覧などのサービスもご利用いただけますので、ぜひご活用ください。

LIXIL ビジネス

施工事例

<https://www.biz-lixil.com/case/>

LIXIL商品をご採用いただいた、さまざまな施工事例を掲載しています。

宿泊施設、教育施設、集合住宅などの建築用途からの検索や、外装・ファサード・サッシ、エクステリア、トイレ・洗面などの空間別での検索とあわせて、竣工年や地域で絞り込むことも可能です。最新事例を定期的に追加掲載していますので、ぜひご覧ください。

LIXIL 施工事例



東京ミッドタウン八重洲

新しい価値を創出・発信する、多彩な要素で構成された大規模複合ビル。カーテンウォールのガラス水平ルーバーが、表情豊かなファサードを演出

所在地 | 東京都中央区
竣工 | 2022年8月
設計 | 日本設計(基本設計・実施設計・監理)、竹中工務店(実施設計)
施工 | 竹中工務店
LIXIL商品使用空間 | 外装壁タイル、トイレ・洗面、カーテンウォール
事例詳細URL | <https://www.biz-lixil.com/case/all/B210182/>



嬉野温泉駅

温泉宿の趣を演出する、細い縦格子ルーバーのファサード。歴史ある嬉野を洗練された和の構成で表現した、湯どころの駅

所在地 | 佐賀県嬉野市
竣工 | 2021年9月
設計 | 鉄道建設・運輸施設整備支援機構 九州新幹線建設局、JR九州コンサルタンツ
施工 | 鹿島・若菜・松尾一建工業特定建設工事共同企業体
LIXIL商品使用空間 | テラコッタルーバー(特注)
事例詳細URL | <https://www.biz-lixil.com/case/all/B210171/>



ライトキューブ宇都宮

宇都宮駅に直結した、交流とにぎわいがあるコンベンション施設。ホワイエのトイレは可動間仕切りで大便器の男女比率が調整可能

所在地 | 栃木県宇都宮市
竣工 | 2022年11月
設計 | AIS・アール・アイ・エー設計共同企業体(設計・監理)、隈研吾建築都市設計事務所(デザイン監修)
施工 | 前田・渡辺・中村・増測建設共同企業体
LIXIL商品使用空間 | トイレ・洗面
事例詳細URL | <https://www.biz-lixil.com/case/all/B210180/>



西神住宅団地パークアベニュー キャンピ設置工事

駅周辺の再開発で新たな区庁舎、文化施設が誕生し、広場がリニューアル。採光性の高い屋根付き歩道で、広場から区役所まで快適にアクセス

所在地 | 兵庫県神戸市西区
竣工 | 2023年2月
設計 | 神戸市都市局新都市工務課
施工 | ヒョウ工務店
LIXIL商品使用空間 | 通路屋根
事例詳細URL | <https://www.biz-lixil.com/case/all/B230009/>

BIMデータ更新のお知らせ

ビルサッシ「PRESEA-S」の段窓「FIX/FIX」「FIX中方立/FIX中方立」のRevitデータ、「集合住宅用システムバスルーム BZW」、「ホテル向けユニットバスルーム BSW」のRevit・3D-DWGデータ、「パブリック向けタンクレストイレ」のRevit・ARCHICAD・3D-DWGデータなどを追加公開しました。

パブリック向け、住宅向け商品のデータを随時追加しておりますので、ぜひご活用ください(一部、ご利用には会員登録が必要です)。

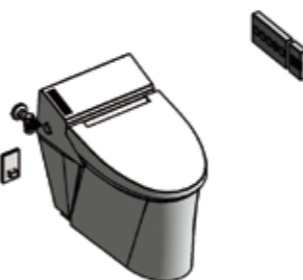
https://www.biz-lixil.com/prod_data/bim_rev/



ビルサッシ「PRESEA-S」の段窓



「集合住宅用システムバスルーム BZW」



「パブリック向けタンクレストイレ」

INAXライブミュージアム

企画展「Rooted in Clay—人も家も土から生まれた—」

会期 | 開催中、2023年9月19日(火)まで

建築に土を用いる、アメリカ先住民・プエブロとメキシコをそれぞれルーツにもつアセーナとビル・スティーン夫妻。メキシコ国境に接するアメリカ南西部・アリゾナ州で、30年以上前から土やストローペイル(藁ブロック)など自然素材を用いた家造りを広めるワークショップを開催し、技術の交流や習得をしに世界各地から人々が集っています。環境負荷の少ない素材や技法について自らも積極的に学び、ノウハウを採り入れてきた夫妻が特に興味をもち影響を受けたのが、洗練された表情をつくりだす日本の左官技術です。

自然素材をベースにしながら、新しい発想や創造力を用いて腕を振るう飛騨高山(岐阜県)の左官職人・挟土秀平は、2004年から3度、スティーン夫妻を訪問し、実践を通して日本の伝統技法やものづくりの精神を伝え、関係を深めてきました。

本展では、異なる土の建築文化をルーツにもつアセーナ、ビル、挟土の3人を招聘し、プエブロ、メキシコ、日本をテーマにした土の造形作品を、公開制作で仕上げさせていただきました。会場いっぱい展示されている表情豊かな土の作品から、風土が育んだ思想や精神性を感じてみてください。



会場風景 [3点撮影: 河合秀尚]

LIXILオンラインショップのお知らせ

LIXIL公式のオンラインショップでは、メーカーならではの商品知識で、お客さまのライフスタイルに合わせた商品提案をしているほか、INAXライブミュージアムのオリジナルグッズの取扱いもしています。ミュージアムショップで販売している商品や、企画展の関連冊子、工作キット、毎日の生活を豊かに彩るアイテムなどを取りそろえています。ぜひご活用ください。



企画展の関連冊子



LIXIL公式
オンラインショップ内
<https://www.care-goods.lixil-online.com/house/ilm/>

INAXライブミュージアム

※最新情報や開館時間などの詳細はWEBサイトをご覧ください。
<https://livingculture.lixil.com/ilm/>
所在地 | 愛知県常滑市奥栄町1-130
Tel: 0569-34-8282
休館日 | 水曜日(祝日は開館)、年末年始

たとえばあなたが、
とある時間のとある地点に立っているとすると、
あなたはあなたを中心として広がる玻璃の天球に、
あなたが視認できる空間のすべてを焼き付けよう。
影も形も、光も色も。

55箇所の空間を球に焼き付けたら、
夢い顔の王に届けに行こう。
王は55個の球のために55室の包をあてがうだろう。
馬乳酒の酔いに揺られながら、
あなたの55度の航海の物語を再生するために。

ところで、あるとき王は気づくだろう。
まさにあなたのために建てたはずの包が焼き付けられた、
吸い込まれそうに透明な球があることに。

王は果たして、座してあなたを待っていたのだろうか。
それともあなたのポケットの中にいたのだろうか。

すべての建築は平面を通じてつくられる——イメージを人に伝えるために、ドローイング、スケッチ、テキスト、図面などさまざまな平面表現を行うところから建築は立ち現れるもの。ここから始まる3ページで、建築家の手を通じた自身の建築観を表す平面表現を試みる。

紙上の建築 17

記録と再生を司る環境球

FICCIONES

360度カメラで撮影したような、ある場所の環境をまるごと記録したデータを「環境球」と呼んでみよう。その環境球を3次元コンピュータグラフィックスに投入すると、空間の背景や、光環境が再現される。

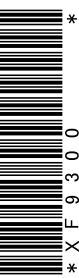
800年前、異国のある場所の環境を、王フビライに伝えた男がいる。ヴェネチアの商人マルコ・ポーロだ。彼は環境に含まれる情報を筆記・口述したのだが、その記録・再生の技術は、21世紀のいま、環境球という技術に換えることができる。それを空想したのが今回のフィクションによる作品。

この作品では、マルコの物語「見えない都市」に登場する55の異国の風景が、それぞれ55の環境球としてデータ化されている。その環境球を1つずつパオに投入した風景が次ページ見開き。データがもっている光環境がパオ内部に反映されている。球表面には球がもつデータの中身がインデックスのように現れている。この球は異国の風景へのアクセスポイント。そこからアクセスして現れた風景がこのページの画像だ。そこには元のパオに戻るアクセスポイントの球が表示されているが、ということは最初のパオ自体、別の環境球の風景だったのか。(編集室)



FICCIONES (フィクション)

DOMINO ARCHITECTS: SUNJUNJIE, GOSUKE SUGIYAMA からなるプロジェクト。一連のイメージによって、架空世界と物質世界とが互いに入れ子になっていくような作品を手がける。その創作は一貫して架空世界の中で行われる。複製/反復/循環の手法によって物質世界では不可能な空間を構築し、素材を与え、それ自体に言及する。建築家、デジタルジェネラリスト、アーティストという枠を超えて活動する彼らの作品は、空間であり現象であり、物語である。



LIXIL

XF9300 01 2023.7.20 発行